震撼せし双極児

劫刹天軌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
震撼せし双極児

【Ｎコード】
Ｎ００７３Ｑ

【作者名】
劫刹天軌

【あらすじ】
家族旅行に来た双子の直斗と理乃。
その帰り道、不慮の事故にあってしまった二人。
その時、彼らの前に神を名乗る変人が現れ、別の世界に誘われる。
それは『ゼロの使い魔』の世界であった。

プロローグ

目が霞む…一体何があったんだ？

俺の周りは焼け野原で車が横転している。そっか…家族旅行中にダンプが突っ込んできて爆発したのだろう…両親の姿はなく、黒こげの何かが覆い被さっていた。
「おいおい、こりゃマズいって…！！妹は…無事なのか？」
周囲を見回して、隣の黒こげの何かが転げ落ちて、妹の…理乃の姿を目視する事ができた。

「理乃…っ痛！！傷が酷いな…救急車を呼ばないと…流石に携帯は壊れてるか…」
少年は、突然凍るような寒さと酷い睡魔が襲ってくるのを感じた。
ズキズキと痛みが走り、ふと弱音を吐いた。
「ああ…俺死ぬんだ…感覚が無…『やぁ災難だな少年』」
「「……」」

にっこりというより、ニヤニヤと笑った人が浮いてる。
てか…空中に人が浮いてるよ！！
彼の者は、その表情を変える事はなく…
『嫌だな～そう見つめられると照れるじゃないかぁ～』
…と悪びれる様子は一切合切ない。

「いやいや…そゆ問題か？この一面煙だらけなこの状況でよぉ…」
ついつい突っ込みを入れたが、妹の言葉が耳に入った。

「おにぃ…ちゃ」
掠れるような…細々とした声が少年の耳に入り込む。
「理乃…おい！しっかりしろ！」
ヤバいな…二人共、血が足りない…一刻も争う状況…しかも瓦礫に囲まれていて、俺たちに登る体力なんて残ってない。
仕方ないよな…例えほぼ無さそうでも…

「頼む。助けて…くれ…」
『ヤダぷ～』
わかっちゃあいたがよぉ！？てめぇ！ぶっ殺したろかワレェ！！
だが…ここでこんな事を言えば死んでしまう……
…背に腹は変えれんか
「お願い…します。救…急車を…１１９番を…」

『いやいや、見物にきただけだしね…』
横に視線を逸らし、目を合わせようとしない。
コイツ、コロシタホウガヨノタメダヨネ？
『そんな邪悪なコト考えるとほってくよ』
「えっ読心術！？」
瞬間的に考えついた思考がそれだった。

マズい思考が読まれた！しかも口に出してしまった。お前何なんだよ…んな事、神様とか…何か特別な力でもない限りできないだろ…
『そだよ～…分かってるねぇ少年』

ほっ…怒ってないか神様…って違うぞ！絶対違う。
こんなのが神様なら俺ら人類死亡確定…
『決定！ほっとく』

自称神様のニヤニヤとした表情は消えないが、青筋がピクピクと脈打っていた。

怒ってる〜

マズい、このままだと…プロローグなのにエピローグになっちまう…などと考えていると、自称神様は唸りながら言った。

『う〜んそれは流石に困るな…仕方ない、手早く用件を済ますとしよう』

まるで、悪魔のような笑みを浮かべ…ブツブツと何かを言っている

てか…用があったんだな…てっきり、笑いに来たのかと…

テカナンノヨウダヨヘンジンサンヨ

『君たち…もう死んでるからさ。神様として迎えに来たんだ』

あれ？

おいおい…何言ってんのこの人？分かってはいるが…頭クルクル？

てか死んでる？ははははそんなわけ…ないじゃ…？下に足が…

…ありませんねぇ〜

マジで死んだの俺たち？

『理解したかい？君たちは残念だけど死んじゃったんだ』

ふと、空気が重くなっていく…

なる程、コレが俺の死に様かぁ

まるでミン…『そゆ事は言わない言わない』

「それで貴方様のご用とは？死んでしまった私たちにできるのでし

ょうか？」
確かに、死んでしまっては何もできない…って何で魂なのに分かんの？
『用はね…君たちには違う世界に行ってもらいたいんだ。それと一応もう一回言うけど…俺、神様だし』
貴方マジに神様なんですか…世も末だな。
『信用しなくて結構だよ。まぁ…このまま死ぬか、異世界に行くか、どっちが良いかは聡明な君たちなら分かるよね？勿論それなりに優遇はしてあげるよ…無理言ってるのはこっちなんだから…それと肉体は死んでしまってるから転生という形をとらせてもらうよ。それが嫌なら、このままあの世に直行してもらうしかないけどねぇ』
えっと、つまり私たちは拒否権もなく異世界に飛ばされちゃうのかな？
恐いのかな？
『安心しなよ異世界はハルケギニア…つまりは君たちの良く知る《ゼロの使い魔》の世界だから』
そう神様は言うと、手をかざした。手から光が生まれ、光が帯状に広がった。
広がった光は、二人を包み込んだ。
「うぁああ！」
「きゃああ！」
光の中から悲鳴が聞こえ、突然ぷつりと音が途切れた。
数分後、光は消えたが二人の姿はどこにも見あたらなかった。
『あっ！有無を言わさず送ってもうた！直斗、理乃…次の世界でも俺は見守っているぞ』
そう呟くと、神様は空間に溶け込むように消えていった。

目が覚めると暗い闇の中…先ほどの光が嘘のように何も見えない。
ホントに死んだか？それとも夢落ち？

『直斗、理乃…聞こえてるかい？』

どうやら、そのどちらでも無いようだな…てかノリ軽いなぁ

『ついつい送っちゃった。てへ』

「てへ…じゃねぇよ！良いけどさ…良いけどムカつく」

直斗は鋭い目つきで虚空を睨みつけたが、姿が分からず虚しさが漂い始める。

『今ならまだ引き返せるよ…どうする？』

神妙な顔で彼は話しかける。二人は同時に声を上げた。
「「行く（きます）」」
『そっか…そりゃ直人は地獄に行く予定だったし…なら詳しく情報を話すよ』

「ちょいまて…俺地獄予定？」
『だって侮辱したじゃん…』

それから…どれだけの時間が過ぎた事でしょう。
非常に殺伐とした空気の中、お兄ちゃんと神様が笑い合ってます、何か恐いです。
長々とした説明でしたが、簡潔に言うと…

「ギーシュと兄弟かよ…」

…お兄ちゃんはぶ～垂れてますが…私たちは、グラモン家に転生するらしいです…それと私たち、ある特殊な力を授けて貰いました。
残念ですが、今はまだその力を明かせませんがとても強い力なのは確かです。

そして、私たちは説明が終わると同時に…光に再度包み込まれました。

第一話『赤ん坊は羞恥の塊』

ｓｉｄｅ直斗

闇が晴れてきた…光の先に何かが見える。出口か？これで俺の新しい人生が始まるのか…楽しみだな！

「おぎゃあ（着いたか？）」
んっ？あれっ喋れない…
豪華そうな天井だなぁ…
周りを見回すと一人の赤ちゃんと隣に美しい女性がいる。壁も真新しい…
「あらあら起きちゃったの？」
女性がこちらを見て、そっと手を伸ばしてくる。
柔らかい微笑みと、すらっと伸びている手が光に当たって、輝いて見える。

いやいや見とれてる場合じゃないよな、今は状況判断が打倒だよ。
多分喋れないから俺は赤ちゃんになっているはずだ。
隣の赤ちゃんは、理乃という事だろう…ならこの人が母親な訳か？

「おぎゃあ～（美人だなぁ）」
突然、ジ～見られる視線を感じる…
ジ～ッと妹がこっちを見ている。

ナンダイ…イモウトヨ？ニィチャンニナニカツイテマスカ？
「あらあら、セラちゃんも起きちゃったの？」
セラ？妹の名前は理乃何だけど？
ダイジョーブカナコノオバサン？

『転生したんだから名前位変わるでしょお兄ちゃん…』
あれ？妹の声が聞こえるよぉ～赤ちゃんなのにあり得な～い
『お兄ちゃん…神様のお話聞いてなかったの？』

とても不思議そうに聞いてくるが、ここで知ってる何て言ったら…説明は後回しになりそうだ。てかアイツを神様だ！などと…認めてなるものか！
大人の事情というやつなのだが

『…何が大人の事情なのか分かんないんだけど…って結局、知らないから言ってるんでしょ…説明しようか？』

覚えてるよ…でも覚えてると言ったら読者に説明できないじゃないか！
『読者に説明って何のこと？』

だから～……いやいや、とにかく説明して下さい…

この時、俺は母親に高い高いをされるという羞恥プレイをかまされていた。逃げようにも赤ちゃんには力は無く、かつ落ちたらアブナ

イ。妹のセラにはじ～っと見られ、恥ずかしさが頂点に達しようとしていた。
顔に火が出るほど真っ赤に染め上がり、彼は一度抱き締められてからベッドに降ろされた。その後女性はゆったりとした足取りで部屋を去っていき、灯りを消した。

ｓｉｄｅ理乃

まぁ寝たふりを二人でしたからですけどね。でもお兄ちゃんは真っ赤だったような…なんで分からなかったのだろう？

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

その後、二人は寝たふりを続けていたが…周りに警戒を怠らなかった。
『お兄ちゃん、状況確認しよ』
『ああ…』

ｓｉｄｅ直斗

まず、俺たちは名前が変わったようだ。
俺、直斗はシルと変わり、理乃はセラと変わった。
転生前通り双子で生まれ、ギーシュの一つ下。
そして、俺たちは特殊な力として、テレパシーをもらった。
とはいえ、俺たちの間だけしか働かないから、あまり役には立たないかもな？

後は個別に一つずつ

俺は直死の魔眼。某朱い月の姫君を殺害した殺人貴の眼。
万物全ての死を線や点見て、なぞる事で切断し、点を突くことで存在を消滅できる魔眼。しかも彼とは違い自由に見れるかどうか制御できる…正にチートの鏡な力だ。
妹はアピアー。
心理の眼とよばれ…心を盗み見る眼。相手の思考を読み取る悪魔の眼…これも俺と同じく制御でき、選ぶことができる。

ああ…チートは素晴らしいね。

「おぎゃ（あっ…）」突然セラがテレパシーを切り離し、声にならぬ声をあげた。
見た限り、足をもじもじさせている…これはまさか！！

『お兄…トイレェ…』
『やっぱそっか…赤ん坊にトイレは無理だろ』

当然、赤ん坊の俺たちには、転がるしか動く手段はない。
何この羞恥プレイの数々は嫌がらせなのか神よ！？

この後、妹が漏らしたのは言うまでもない。０歳の赤ん坊がトイレに行くのも不自然だし、そもそも動けないからである。

『もうお嫁に逝けないよ…』
『いやいや…赤ん坊の時だし、漢字変換間違ってるし…』

当然ではあるが、後に俺もこの羞恥プレイを食らうことになる。

……ホント様々な事がありました。

やっと年月が流れ…俺たちは5歳なった。えっ…他にも色々あっただろって…
イウワケナイジャンハズカシイ…

5歳になったら、親に連れ出され…二人で杖の契約を行いました。
長ったらしい説明を聞きながら、俺たちは念願の魔法を学び始めました。

「……つまりコモンマジックとは口語にて…」
只今勉強中…

「系統魔法はルーンを用い…ルーンとは…」
只今…勉強中…

「そしてメイジにはランクがあり…ドット…」

うわぁあああ！！
おかしいおかしいおかしいおかしいおかしいいいいい！！

ｓｉｄｅセラ

『どうしたの？心で奇声あげて…』

お兄ちゃんは突然心で叫び始めた。テレパシーを繋げて叫ぶから鬱陶しい…

『だって知ってるし、てか髭がキモい…っつ～か何故ギーシュと一緒に…』

確かに髭面のおっさんでダンディー感もない…キモいおっさんだけど教えてくれる人にそんな事……

『ほら、お兄ちゃん、文句言ってないで…ほらコモンマジックの実践だって頑張ろ！』

はぁ…お兄ちゃんって、いつもこんな事考えてたんだね。表情はクールなのに、考えは悪魔みたい…

「では先輩としてギーシュ様、お手本をお願い致します」

「はい、先生…このギーシュ。見事に成功させましょう」

ｓｉｄｅシル

きっしょっ！！６歳で原作と同じ口調って…ああウザいキモい！

その後、ギーシュはライトの魔法を発動させた。淡い光が周囲より集まり、杖先に光が灯る。

しかし精神力が足りないのか、すぐ灯りは消えた。

へっ…この程度かドカスが！せめて手本ならもっとマシなの見せろ

よ！！

「とてもお上手でしたよ！ギーシュ様」

ｓｉｄｅセラ

ギーシュ兄様は魔法を成功できたみたいです。私に成功できるかな？ちょっと不安です…

「では次はシル様、ギーシュ様を見習いライトを発動させてみて下さい。大丈夫ですよ…落ち着いてやれば必ずできますよ」
あっ…先生、心ではできるわけ無いって思ってる。
「シル、君には少々荷が重いかもしれないが…まっ僕を見習い頑張ってみるんだね」
「…そうですねギー兄を見習い、頑張りますよ」お兄ちゃんがマジメな事言った！
天変地異の前触れかな？
でも…真面目なお兄ちゃんが良いよぉ～凄く～

ｓｉｄｅギーシュ

何だかセラの視線がおかしい気がするね。ここは僕に尊敬の眼差しを向ける所ではないのかな？
ああ…先生がいる手前できないんだね…いじらしいなぁ！

ｓｉｄｅセラ

ギーシュ兄様、何か怖い。
アピアーで見たくない見たら…ナニカガオワリソウデス。

『おい大丈夫かセラ？』
お兄ちゃん…心配してくれたんだ！

『いや…何でもないよ、何でもない…』
『そうか？なら良いけど…』

ｓｉｄｅシル

何かセラの様子がおかしい。
何かあったのだろうか？
まぁ…良いや。今はコモンマジックに集中しよう…

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「光よ…蝋燭に収束し、灯りを点けよ…ライト！」

第二話『炸裂！異常魔法』

「光よ…蝋燭に収束し、灯りを点けよ…ライト！」

杖先から光が溢れ、帯状に辺りに輝きを満たす。太陽の照りつけるような日差しがあったにも関わらず、突然の異常な明るさの輝きを前に、３人は眺める事すらできなかった。地面が地震のごとく揺れ始め、立っていた先生が壁をつかんで堪えてる。

「なっ何て魔力だ！こ…コモンマジックでこの力、ありえない！！」

先生が驚愕の一言を漏らした。大気の震えと共に、魔力の波が蝋燭に収束した。

収束しきると同時に、蝋燭に火…というか業火のごとく炎が舞い上がる。

舞い上がる炎を確認すると、ふぅ～と息を吐きシルの杖は唸りを止める。

地面の震えが止まったが、杖先の光は輝きつづけた。蝋燭の火も…火炎のごとくと言うのが正しく思うほど火の放出を続けていた。

余談だが、杖の輝きは2、３時間は光り続けた。

「どうですか先生？私のライトは上手くいきましたか？」

シルは丁寧に…大人びた口調で先生に聞いた。ギーシュは驚愕し、口が塞がらなかった。セラは微笑むように手を叩き、賞賛していた。

「すご～いお兄ちゃん！」

「だろ？やりゃできるんだよ…俺」

シルが得意満面の笑みを浮かべながら、セラに近づいていく。先生

ははっと気を取り戻し、言葉を絞り出す。
「とっ…とても素晴らしいライトでしたよ」

ｓｉｄｅセラ

「じゃあ次は私が殺りますね！」
お兄ちゃんが、とても凄いライトを使いました。私にできるのでしょうか？
『おいセラ…やりますねが殺すの字になってるよ！？』
そこなのお兄ちゃん？というか、ここは普通、私を励ますとこでしょ！？何で突っ込むの？
もぅ！

ｓｉｄｅギーシュ

なっ…何なんだ今の魔法は？ライトは光を灯す魔法の筈。なのに蝋燭には火が灯り、地震が起き、挙げ句の果てに大気が唸るなんて……
僕は既に負けているのだろうか？いや、僕は兄なんだ。威厳を保つ為にも、負けるわけにはいかない。

でも勝ち目何かあるのか？…セラがほっぺたを膨らまして、可愛らしいなぁ！うん…

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

セラは意識を杖先に集中していた。精神力は先程までとは違い、力が淀みなく溢れ続けた。
杖を天に掲げ、徐に口を開いた。

「杖よ…光を帯び輝け…ライト！！」
口語を唱え、杖に意識を集中した瞬間。またも地面が揺れ始め、大気の変わりに噴水の水が空高く舞い上がる。舞い上がる。水が蝋燭の炎に当たり、蒸発して霧がユラユラと発生していた。
霧に包まれセラの姿を目視できなかったが、霧の中で光が輝いているのを確認できた。
先生がウインドで霧を払うと、中央に光り輝く少女の姿があった。
「成功しましたよね先生！」
「あっ…ああ成功だね、おめでとう」
セラは杖をゆったりと下ろし、きびきびとシルたちに近づいていく。
近づくにつれ体の輝きはなくなり、霧によって光が乱反射したモノであることが分かった。

…こちらも余談ではあるが、杖の光は2時間は続いていた。

ｓｉｄｅ先生

なっ…何て子供たちだ…私はコモンマジックを教えた筈だが…系統魔法のような事が起きた。これはグラモン伯爵にお伝えせねば…
「え～これで授業は終了とします。各々復習を忘れず、日々の練習を怠らないように…」

というのは建前だが、まだ子供だ…不思議がることもあるまい。

ｓｉｄｅシル

怪しい。俺たちがあれだけやったの見てこの反応、それは何かを企んでいる証だ。
一体何を企む？そうか！！
『セラ、先生をアピアーで見てくれ！』
『お兄ちゃん！！やったやったできたよ～～』

おいおい、浮かれてるよ…
何のためのアピアー？全く…コモンマジック位で騒ぎやがって、俺たちチートだし当然だろ？

ｓｉｄｅセラ
やりました！！不肖の私はやりました！
ライトを成功し、尚且つお兄ちゃんに負けない位の凄いライト。
全神経を集中したかいがありました。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
あれから時間が経った。シルは一抹の不安と考えをよぎらせ、セラ

は只々喜々揚々と喜び続けていた。
男女の違い、完全では無いにせよ…鏡のような二人は両極端な表情をしていた。
授業が終了した為、二人はゆったりと歩いて部屋に戻っていく。

「待ちたまえシル」
後方からギーシュが手を伸ばしながら言った。
しかし、シルは止まる事はなくブツブツと何かを言いながら、その場を去っていく。

…その後、とある場所で会話が始まっていた。

「…というわけでございます」
「なる程な…ご苦労であった…下がって良いぞ」
一人の男が言葉を聞き、一礼した後退室した。

「なる程な…ならば、次の『あの日』で頼んでみるとするか……」

もう一人の者はある鏡を見ていた。その鏡にはその者は映らず、シルとセラの双子の姿が映し出されていた。

第三話『恐怖の誕生会～死亡フラグ祭～』

ｓｉｄｅシル

風は舞う、そして俺は上空より空気に叩き落とされる。
とっさに地面に力を与え、柔らかくして激突の衝撃を抑える。
「ッ痛！」
「エアハンマー！」
痛みを堪えている俺を、無情な程の強力なエアハンマーが叩きつける。瞬間的に身をよじり、右にフレイムボールを使い、爆風により左に吹き飛びエアハンマーを回避する。

「どうしました？まだ私に触れることすらできていませんよ…」
息絶え絶えな俺を、じりじりと歩み寄るモノ。まさに鬼神という言葉がよく似合う。

嗚呼…
何故こんな事に…それは…数日前の事。

今日は俺たち兄妹の誕生会。
豪勢な料理と、様々な高貴な方々が来賓として招かれた。
グラモン家の威光を示す為かは知らないが、お金も無いのに無理をしていたのは明白だった。

そこへ…とても威厳に満ちた表情で、ニコニコと近づいてくる。
「これはこれはグラモン伯爵。こちらがご子息の？」
「はい、陛下。息子のシルと双子の妹のセラでございます」

これが陛下か…流石に貫禄があるな。俺たちは慌てて膝をつき、頭を垂れる。
「お初にお目にかかり、光栄にございます陛下。私はシルと申します…そして妹の…」
「セラです。お目にかかれて光栄にございます」

「とても礼儀正しい子達じゃないか。話しは聞いているよ…」
んっ…何か神妙な感じだな…嫌な予感がする。
そして…俺は分からなかった。既に死亡フラグは立っている事を…
……

数分経ち、何者かが姿をあらわした。

死亡フラグ2が立ちました

「あなたはだぁれ？」

暴走姫君アンリエッタが現れた…コマンド！！

たたかう
いれかえ
さくせん
にげる

たたかう
いれかえ↑
さくせん
にげる

『何考えてんのよお兄ちゃん』
『おおっ妹よアピアーとは…』
『姫様が待ってますから』

セラが怖いよぉ！

「お初にお目にかか…「あそびましょ！」」
いやいや、俺を何や思てんねんな…友達か？初対面で！！ってか一

国の姫君ともあろう者がんな事でええんかい…

「姫様…私の様な者に挨拶を賜り、ありがとうございます。私はグラモン伯爵が五男、シル・ド・グラモンです。こちらが妹の…」

礼儀正しく、優雅に一礼した。隣で妹も同様の事を行い、笑顔で言葉を交わす。

「グラモン伯爵が長女、セラ・ド・グラモンです。以後お見知りおきを…」

「そんなのいいから…あそびましょ？」

あそびましょ？…じゃねぇよ。仮にも、トリステインの姫だろ？普通に考えてありえねぇだろ。

「その心使い…光栄至極にございます。ですが私は…「いいからこっちに来いっつってんだろ！？」

ひぃ！？」

何？何なの？今、アンリエッタが野太そうな声を…

「アッ…アンリエッタ姫様、先ほど何とおっしゃられましたか？」

「はい？わたくしは何も言っておりませんが？」

そだよな…うん空耳だな！大丈夫かな俺は、某症候群Ｌ５じゃないよな…大丈夫だ未来の女王（感染者）がいるし…

『何考えてるのよお兄ちゃん…』
『妹よアピアーは卑怯じゃない？』
『卑怯じゃないよ…私のと・く・べ・つだもん！！…だってお兄ちゃんには直死の魔眼があるじゃない！』

いやいや、直死の魔眼は扱いにくいにも程があるよ…見られたら異常だと言われるだろうし…

「アナタ誰？姫様に何か用なの？」
桃色のブロンド…鳶色の瞳…まさか、死亡フラグが…と思いましたよ…はい。
死亡フラグ3が立ちました……

その後、やっぱりおままごとを決行された。
まぁ…ご想像にお任せしますよ…こんなままごとに付き合ってられないよ。とそんなレベルですから！思い出すのも恐ろしい…

それが終わり、ゆったりと家に戻った俺は見てしまった。

俺の結末を…

今日の最終地獄を…

「どうだろうか？烈風のカリン…私の五男、シルに修行をつけてくれないか？何なら養子にあげてもいいのだが…」
父上と、あの伝説たる存在…烈風のカリン様が密会をしている。
ダガコレ、シボウフラグデスヨネ。
「養子は、私の夫に聞かねばならないが…修行なら構わない。だが、それ程見込みがあるのか？」
そうですよ…私には才能など毛頭ございません。だから止めて…妹を理乃を残して死にとうない。

「ああ…素質はある。前に話した通り、最初にコモンマジックとは思えぬ現象を引き起こした。次はランクだ。弱冠６歳にして、土のライン以上のメイジで…他の属性もドットの力を有している」
あれっ？その時、父上居なかったですよね？

まさか！遠見の鏡？確か…オスマンしか使えない筈なんじゃ…
そんな事を考えていたら、話しは進んでいく。
「だが、ワシには他に力がある気もするのだ。兄妹揃って、大人顔負けの洞察力と観察力を持っているからな…」

父上…

そう思うならカリン様に預けないで下さい…
お願いです。
死んでしまいます…

「良いだろう。そこまで言うのなら、この私直々に修行をつけてやろう…」

嗚呼…死亡フラグ、立ち切った…
いや、まだだ…逃げ切るんだ。俺にはまだこの足がある。

「何だ？ここにいたのかシル。ご紹介します、ラ・ヴァリエール夫人。息子のシルです」

死亡確定！

だが、礼儀を欠けばさらにマズくなる。ここは丁寧に…

「これは、ラ・ヴァリエール公爵夫人。紹介預かりました、シル・ド・グラモンです」

ありゃ？反応無いのかな。無礼だったのかなぁ？

ゆっくりと近づいてくる、カリン様。嗚呼…死ぬかな俺。

「話を聞いていたのでしょう？」

へっ？まさか…そんな事が…バレてた！！

「何の話でしょうか？ラ・ヴァリエール公爵夫人」

「聞いた通りです、貴方は…我がラ・ヴァリエール公爵家に住込みで訓練を行います」

「何の事でございますか？初耳でございますが…」

俺が白を切ると、カリン様はふっと笑いを浮かべた。

俺には、その姿が悪魔のようにしか見えなかった。

「私は風のスクウェア。音は空気の振動でおきる…なら私に聞こえ

ない訳がないでしょう？」

あはは…こりゃ駄目だ…やっぱ烈風のカリン様にはかないませんね。

「中々聡明ですね。シル…でしたね貴方は既に、この状況を理解している…なら、逃げられないことも理解しているでしょう？」

ああ…死亡フラグ確定だね。でもまだ、死にたくない。何とか生き残ってやる。

『じゃあな…理乃。お兄ちゃんの事、忘れないでいてくれな…』

『えっ！？…お兄ちゃん！！おにぃ…』

回線を切断し、カリン様に手を引かれて…ラ・ヴァリエール公爵家に旅立ちました。

その時、妹が何をしていたのか…俺には分からなかったが…

おそらくは泣いていてくれるだろう…

ｓｉｄｅセラ

私は、自分の部屋で本を読んでいた。

その時、お兄ちゃんからテレパシーが来て…

昔の名前を呼びながら、まるで…別れの言葉の様な事を言われた。

その後に、お父様から…お兄ちゃんがラ・ヴァリエール公爵家に…

カリーヌ様に訓練を受ける事になったらしい。

分からないけど…テレパシーが繋がらない。凄く嫌な予感がするの…

お兄ちゃん…無事でいてね。
祈ることしかできない私を許してね？代わりにお兄ちゃんが帰ってくる頃には…
グラモンを裕福にしておくから…

ｓｉｄｅシル

そして…冒頭に戻る。

恐怖の鎖が体を縛る。まるで体が動かない、ガチガチと歯が鳴り…
だが、このままおめおめと敗れるわけには逝かない。（漢字が違う）

「ブレイド！」

杖を刃に変え、正眼の構えで杖を構える。
カリン様は、悠然と杖を構えている。
「シル・ド・グラモン！突貫します！」
某星屑の記憶の主人公を思わせ、風を纏って特攻をかける。
「玉砕覚悟か？カッタートルネード！！」
鋭い竜巻が発生し、体を切り刻もうとする。

―直死の魔眼―

死の線を素早くなぞり、カッタートルネードを真っ二つに切り裂く。

「！…これが秘めたる力か！？」

「はぁあああ！！」

俺の刃はカリン様に届くことは無く、カリン様のブレイドによって魔力ごと霧散する。衝撃を軽くするため後方に跳ぶが吹き飛ばされた。

「甘いな…」

ｓｉｄｅカリーヌ

何でしょう？カッタートルネードを切り裂いたにしては…とても脆い。

一体どの様にして…スクウェアスペルを無力化する事ができたのでしょうか？

「……まだ…です」
まだ…戦えるのですか？６歳にしてはやりますね。

ｓｉｄｅシル

直死の魔眼も…なぞれなければ無力か…
だが、まだだ…このままやられたら…

男じゃない！！

「…ゴーレムよ！！」冷たい無機質なゴーレムが、無数に現れた。
おそらく、この戦いでトライアングルクラスまで上がったのだろう…

「行け！ゴーレムたちよ！！」

第四話『訓練初日』

ｓｉｄｅシル

何だ…この光景は？
俺の数十体は居るゴーレムたちが、たった一発のウインドブレイクで、全て粉々に砕かれた。
一瞬で砂に変わり果てたゴーレムたちは時間稼ぎすらできなかった。
「呆けている場合ではないでしょう？カッタートルネード！！」

またも鋭い竜巻が、俺に襲いかかってくる。
「くっ！ブレンド！！」

―直死の魔眼―

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

線をなぞり、カッタートルネードを真っ二つに切り裂いた。だが、さらに前方にはもう一つのカッタートルネードが存在していた。
もう一度、線をなぞろうにも…瞬間的過ぎて見る暇すらない。
体をよじりながら、地面より土の壁を形成し、カッタートルネードを食い止め様とするが…壁は脆くも崩れ去り、その間に後方へ跳ぶ。
しかし、カッタートルネードの真空層が当たる寸前、シルは直死の魔眼で点を貫き、消滅させることに成功した。
「消したみたいですね…ふふふ面白い。久々にちょっと本気をだしましょうか…」

迸る威圧感が増し、カリーヌは一歩一歩…大胆に歩を進める。魔力

が空気の流れに混ざり、風を捲く。捲かれた風は拡散し、人の姿が3人は見える。

ｓｉｄｅシル

恐ろしい。流石は原作最強の烈風のカリン様…

ウインドブレイクで周囲を瞬殺し、カッタートルネードを時間差2連発。さらに偏在か…

直死の魔眼がなければ…何度死んだことだろうか？

だが、俺からしたら…おかしいな。

カリン様は当然、風メイジが最強たる由縁の偏在を使える…そんなの当たり前だ。

しかし、人数が自分を含めて3人は有り得ない！！

ワルドの奴だって、5人に偏在できた筈。カリン様が3人などと…

アリエナイ。

まぁ、色々な魔法を使ってるから…単純に魔力が尽きたのかもしれない。

だが、相手が“烈風のカリン”と称されあまつさえ伝説的存在であるカリーヌ様だぞ！！魔力切れを計算できない訳がない…

なら…何かある！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

冷たい風が吹き、シルは悪寒と共に…吹き荒れる風の音を微かに聞いた。

「「「ウインド！」」」
前方から三つの巨大な風が襲うが、シルは身を翻し、フライで風に乗る。
「くらえ！ウインド」
カリーヌのものと比べれば、微々たる薄い風だが…魔法を撃ち終わった後、タイミングは完璧だった。
「ぐわぁああ！！」
しかし、シルは…首筋から足の指にかけて…ほぼ全体に鋭い痛みと痺れを感じ倒れた。
ウインドはカリーヌの前に消失し、一矢報いる事すらできなかった。
気を失った彼を…カリーヌはレビテーションをかけ、１０人の偏在たちを消し…城のような屋敷に入っていった。

ｓｉｄｅシル

どういう事だ？
何故、ベッドで寝ているんだ？
俺は、カリン様の偏在を見て…それから記憶がない…

…んな訳ないか。

惨敗か…
分かり切ってはいたが、一矢報いる所か、触れる事すら叶わなかった…
原作最強はやはり、死亡フラグだな…
直死の魔眼がなければ今頃…
頭を左右に鋭く振り、恐ろしい考えを消そうとした。
…消えるはずもないけどね。

ふと、空を見上げると…二つの月がユラユラと朧気に霞んでいる。
「朧月か…」

双月を見ると…ふとセラの事を思い出した。
今頃…どうしてるかな？と疑問に思い、テレパシーを使った。

ｓｉｄｅカリーヌ

シルは気がついたようですね。
半日もの間、寝てましたが…もう少々手加減を加えるほうが良かったのでしょうか？

…にしても情けない。3回もカッタートルネードを消せるのに…偏在のライトニング・クラウド3発を直撃し、気絶するなどと…
フラフラであったとしても…実戦では死を意味するのだから、男なら根性を見せなさい…根性を！
まぁ…今日は初日ですから多目に見るとしましょう。

末娘のルイズは、未だに船の中にいるようですね。
私とシルの訓練を見ていたようでしたから…
半日は船でいじけていた…そうゆうことですね。
全く、ルイズは1つ年上だというのに…

sideルイズ
今何か悪寒がした。
寒いからかな？そろそろ部屋に戻ろうかな。

それにしても、シルって凄い子だった。
お母様のカッタートルネードをブレイドで斬り裂き、偏在まで使わせた。
私だってって、言えない。
アイツは年下なのに、土のトライアングル。私はコモンマジックすら爆発してしまう。
凄い劣等感…いえ、才能の差なのだろうか…

顔立ちも申し分ないけど、誕生会で妹の方に睨まれてたのよね。
何が気に入らなかったのかな？

寒い…そろそろ部屋につくはず…

ｓｉｄｅセラ

もぅ…お兄ちゃんは一体何してるの！？
ラ・ヴァリエール家に訓練しに行ったのは良いけど…連絡がないし…
テレパシーには応じない。全く…お兄ちゃんは何してるんだろ？
誕生会では、ルイズとアンリエッタ姫の二人とおままごとしたとき
…ずっと見てたよね。ルイズの事！！

もぅ…お兄ちゃんの…

『お～い…『バカァ～！！』』

ありゃ？回線が繋がった？
『…どうしたのお兄ちゃん？』
『こっちの台詞だ！ったく頭が痛いわ！』
『ごめんねお兄ちゃん』

私たちは、話を始めた。脳に刺さるような感じだったけど…

とにかく、お兄ちゃんから色々聞き出さなきゃ！！

第五話『自覚と決断』

セラの寝室は、殺伐とした空気が流れる。
しかし、シルには地獄の1日から解放された感覚が満ちており、その事に全く気づかなかった。
『お兄ちゃん…』
異常な程トーンの上がった声、普通は気づくはずの不自然さだが…
シルは気づくことなく言葉を返した。
『なんだい？』
優しさと嬉しさに満ちた言葉。しかし、セラはゆったりと殺気を奥に押し殺したような言葉をだした。
『お兄ちゃんって今どこにいるのかな？かな？』

まるで探るような一言。某持ち帰る鉈娘のような発言…
『ああ…俺さ、今ラ・ヴァリエール家にいるんだ。そこで烈風のカリン様に修行してもらってる』
シルの声は…徐々に張りを無くし、震えていった。
『ど…どうしたの？お兄ちゃん…』
今までの喜々揚々としたシルの空気が重たく沈み込み…
セラの空気も殺伐さが消え、重たい空気に支配される。
『いや…何でもない。今から話すよ…昨日と今日の惨劇をさ…』
セラはゴクリと唾を飲み、全神経を話に集中した。

ｓｉｄｅセラ

いつもと違うお兄ちゃん…
とても辛そうで…何だか自分がちっぽけに見えた。あんな事でイライラしてた自分が恥ずかしくなった。
『実は…かくかくしかじかで…』
『お兄ちゃん……』
嗚呼…余程疲れてるんだね。かくかくしかじか何かで通じるわけ無いのに…

ｓｉｄｅシル

何かボケ殺しを食らったな。
セラの口調からみて…どうやら本気で心配してるらしい。とてもじゃないが、言いにくい。とりあえずは成り行き任せだな。

俺は徐に話を始めた。今日の出来事を…

ｓｉｄｅセラ

どうやらボケだったみたい。
少しお兄ちゃんとのテレパシーを続け、全ての本音を聞きました。
誕生会の事、カリーヌ様との…訓練という名の殺戮の事、帰る事は
おそらく直ぐにできない事。

それはつまり…ルイズの家に泊まるという事でもある。
何だか胸が苦しいな…寂しいのかな？体が戻って、ちょっと子供っ
ぽくなっちゃったのかな？

実際、転生前からだったら大人なのに…
心は子供みたい…

ｓｉｄｅシル

何だか急に大人しくなった。まぁ…話したらそんなもんだよな。

ふと考えていたら、俺とセラは欠伸をしていた。
とりあえず、俺たちは朝も早いので眠ることにした。

ｓｉｄｅルイズ

ゆっくり部屋に帰っていたら、途中にお母様が仁王立ちで立っていました。
「ルイズ」
「は…はいお母様！！」
私は慌てて声を上げました。その後、お母様の手がゆっくり顔に伸びてきて、びくりと体が硬直しました。
脳裏に船の上の記憶と、シルと戦ったお母様など…様々な事が浮かんでくる。
顔を上げる事ができず、俯いたまま恐怖で震えました。
「ルイズ？、顔を上げなさい」
普通の口調なのに…お母様の気配に怯えました。
その雰囲気に堪えきれず、眼に水が流れ落ちました。
突然だったからか…お母様が心配そうに見始め、先程の雰囲気が消えましたが…私には涙を止めることはできませんでした。
「ルイズ！！…どうしたのです？ルイズ！？」
心配してくれてるのは、分かってるのに…水が溢れ続けて止まらない。
その時、ポツリとシルとお母様の訓練の事が頭に浮かんで来て…言葉をもらしてしまいました。

「シルが…シルが…」
ヒック…ヒック…としゃっくりの様に涙で言葉が途切れ途切れにしか出ず、お母様を勘違いさせてしまいました。

いつものお母様と違い、ゆっくりと私を抱きしめて優しく頭を撫でてくれました。
「落ちつきなさいルイズ。シルが貴女に何をしたのですか？」

ｓｉｄｅカリーヌ

その後、ルイズは何も言わず外に走っていった。顔を真っ赤に染め上げて…
今日はルイズの婚約者は来ていない筈。
やはり、シルが何かしたのでしょうか？
いや…シルは我が家に着いてすぐに訓練を開始し、先程まで気絶していた。
それがルイズに何かできる訳はない…
だが、ルイズは言った「シルが…」と。
そして、先程のルイズの奇行と顔の火照り……

導き出される答えは一つ…

恋をしましたね？ルイズ…なら私は母として、見守りましょう。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

双月の光が、部屋の窓に差し込む中…シルは寝ることなく、只、ぼんやりと考えていた。

自分の無力さとこれからのことを…

窓を開けると冷たい風が吹き、シルの頭を冷やした。

ユラユラと長く金色の髪は動き回る。

邪魔だな…切るか…

刃物を探すが、当然部屋には置いてる訳はなく……渋々マントをバサリと羽織り、外にでる。

寒さに身を震わしながら、カリーヌと戦った庭にでた。

「錬金」

シルが呟くと、杖の周りに土が集まり、ナイフができた。
無造作に髪をつかみ、縦に一閃。
バサッと髪が落ち、手に当たる。ふぅと一息吐き、髪に錬金をかける。
髪は金色のリボンになり、ポケットにしまい込む。
「整えなきゃ…変だろうな…」
つい口にして、石に錬金を使い…鏡を作る。髪を先程のナイフで切り、整えていく。切った髪は風で集め、火で燃やした。
待てよ…確か燃えたら…

シルは考え、風で煙を集めて石を中に入れる。
石の元素を全て追い出し、煙の炭素を無理に錬金で詰め込む。
その後、ゴトリと音を立て…石墨が落ちた。

やっぱ、トライアングルクラスじゃ…細かくできないからダイヤモンドにはならないか…

シルは自傷気味に笑うと、後ろに気配を感じて、バッ…と振り向く。
「誰だ！？」
「…シル」

桃色がかったブロンドの髪がユラユラと揺れながら、驚愕の表情と赤みを浮かべ、少女…ルイズは目前に佇んでいた。
見られた！？だが、これ位見られたって大丈夫の筈…

ｓｉｄｅルイズ

驚いた。いや違う、凄かった。土のトライアングルメイジと聞いてたけど……一瞬でナイフを造りだしたのは分かる。けど風を操り、火を点け、挙げ句にナイフの振りは、消えたように鋭く…寒気さえした。貴方は土なのに、何故ここまで万能に魔法が使えるの？それに何か…黒いものを錬金していた。

これで一つ年下？こっちはコモンマジックすら成功してないのに…そう思うと、眼に水が溜まってきた。

「誰だ！？」

後ろに立っていたら、気づかれた！？

泣き顔は見られたくなくて、すぐに目を拭って言おうと思った。凄いとか凄かったって…でも名前を呼ぶのが精一杯で、涙が溢れそうになった。

「ルイズさん？どうしたんですか？こんな夜更けに庭にいるなんて…」

彼は私を心配している？でも…さっきの一言が本音だろう。

「羨ましいなあ…」

不意に…言葉を漏らしてしまった。

負けを認める発言をしてしまった…自分を恨めしく思うが、彼を羨ましい…そう思うのは仕方ない。そう思いたくはなかったが…自分

が欲しい才能は彼には全てあるように感じた。

「羨ましい…か、なら代わるかい？あの訓練をさ…」

遠い眼で見てくるシル。多分お母様の訓練の事、私にはあれは耐えられないのは分かっている。そもそも、耐えれるわけがない。

「そうじゃないわ…只…その……」

第五話『自覚と決断』（後書き）

何か、上手く書けなくなった？
ギャグが減ってきました。
とりあえず、次も修行編となりますが…見て下さる方、不定期ではありますが…よろしくお願いします。

第六話『受難せしモノ』

ｓｉｄｅシル

ああ…もごもごしやがって！
俺は原作知ってるよ！？魔法が使えない。自分が落ちこぼれだって思っててそれを認めたくないものさぁ…
だけどね…うじうじしてるの見るの、俺は大っ嫌いだからな！

「ルイズさん…何かお悩みでしたら、カリーヌ様にお聞きになれば宜しいのでは？」

はっ！！うじうじして話してさっきの俺の様にズタボロになりやがれ！！
「わ…私はアンタの様に…強くないもの」
ちっ…自虐モードに変更してやがる。
あっ……マズい、このままじゃ死亡フラグが立つ。
てか、会話はできんだろ？親子間でどんだけびびってんだよ！？

……すいません俺もびびってます。

だって…グラモン元帥だよ？
元帥何だよ？…スクウェアクラスは間違いない…

「僕は強くありませんよ…」
双月を見て、俺はルイズの言葉を自分に問いかけるように返してい

た。
だって…セラは別れる前、既に土と水のトライアングルまで使えたんだから…

ｓｉｄｅルイズ
何だか…聞いたらいけない事だったのかな？
でも私はゆったりと言った。
「嘘よ…その歳で土のトライアングルなんでしょ？なら強いわよ…私なんか……」
自分で言ってて、辛くて…辛くて…目に涙が溜まってきた。
「ああ…泣かないで下さい。僕は強くないのは事実ですよ」
「嘘よ…」
「本当ですよ？僕が双子なのは知っていますか？」
「ええ、知ってるわ」
そう答えると、シルは双月から視線落とし、私をじぃっと見つめてきた。
瞳の奥の深みを見ていると、写るものが壊れていく感覚がする。

周りが…

風景が…

空が…

世界が…

そして私が…

ブルッと寒気を感じ、何だか風が舞い上がる感覚…とでも言うのだろうか？

「妹の方が力が強いんですよ…限りなく…土のスクウェアに近いトライアングルですから…」

ニッコリと笑顔を浮かべ、シルは言いましたが…瞳の奥は深みが消えない。

本当は辛いんだ…

私と同じで苦しいんだ。でも私とは違う。

だって私には、トライアングルなんて誇れる力だもの。コモンマジックすら使えない私には…

「ああ～もぅうぜぇ！！」

あれ？……何？今シルの声から、とても野蛮な…？
「うじうじすんな！！その内、蝿になっちまうぞ！？」
「は…蝿？蝿に何かなる訳ないじゃない！？」

ゆったりと私を見るシル。今までの礼儀正しさは無く、冷たい氷の様な鋭い眼をして、酷いコトを言ってきた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
「じゃあ…うじうじ人のコト考える前によ…自分のコトを考えろや！俺が強い？弱い？そんなコトどうでもいい！」
「そんなコトって何よ！アンタには…アンタには分からないわ！！私は…私はコモンマジックすら使えないのよ！アンタとは違うのよ！アン…タは…トライアングル何だから！！」
ルイズはシルの胸元に掴みかかる。くりくりの鳶色が…堪える様に歪み、つーっと水が流れ落ちる。流れ落ちると同時に、ルイズの手が震えている。

シルはルイズをマントで包み込むように覆い、頭を撫でる。
「…何するのよ」
「もう夜風は冷たいし、めそめそ泣く顔は見たくないからな…」
シルはルイズを見下ろした。見上げるルイズは、涙で眼が赤みを帯

びていた。撫でていた手を離し、ハンカチでルイズの涙を拭っていた。
「な、泣いてなんか…ないわよ！！」
ルイズは拭っていた手をはたくと…顔をぷいっと背けた。
シルはハンカチをしまい、やれやれと思いながらも…杖を取り出し、石に錬金をかけて真鍮を作り出した。
作り出した真鍮は米粒大の大きさだった。さらに、錬金をかけ微細なルーンを刻んだ。
それを指でなぞり、力を込める。するとルーンが光り始め、真鍮全体が淡い光を放った。
暗闇の中の光にルイズが気づかぬ訳もなく、正面に立って眼を輝かせていた。

ｓｉｄｅシル
やれやれ…ルイズには困ったもんだ。泣いてるのを認めたくないのか…
まぁ仕方ないな…焚きつける為とはいえ、俺が原因だからな。性格が…難ありだが顔は美少女。泣かしたのは最低だな。
とりあえず、罪滅ぼし位はするか…そう思った。
手頃な石を拾い、杖を当て錬金する。石の中に銅と亜鉛を詰め込み、合金化する。量の問題か、それともトライアングルには難しいのか

…米粒大の大きさしかできなかった。
続いて、錬金をかけた。真鍮にルーンを刻む為に、分子をどかせる。どかせた部分が刻まれる部分だ。細かい作業を丁寧にこなし、刻み込む事に成功した。
最後に、このルーンに力を込めた。といっても、この真鍮自体に力を込めた方が正しいかな？力を込めた指で、ルーンをなぞった。予定通りルーンが光り、真鍮が淡い光を発した。しかし、計算違いなのは…光りすぎた！
案の定、ルイズにバレた。先程、泣いていたにも関わらず…
「ねぇシル。これは真鍮よね？何で光ってるの？」
と…眼を輝かせている。
「はい、真鍮で合ってますよ。そして、光る理由はルーンによって、火の力を蓄えているからです」
丁寧に答えたら、ルイズは一瞬しかめっ面をしていた。何故？今度は年下らしく敬語を使った。顔をしかめた理由が分からない。まぁ…今は普通の表情だから気にしなくて良いか。
「へぇ～火の力って事は…明かりになるの？」
「御察しの通り、とは言えませんね。ルイズさん、手を出してもらえますか？」
またしかめた。まぁ…違ったからかな？気にしない気にしない。
「手？別に構わないけど、何するの？」
疑問ながら手を出したルイズ。華奢な手で、細くしなやかな指に真鍮をのせ、杖と石を取り出した。
「錬金！」
石を粒子に分解し、鉄に錬金。指に巻くように鉄が巻き、真鍮を４本の鉄爪で囲む。
「良く似合ってるよルイズさん」
「これって指輪？」
「うん指輪だよ。火の力を込めた、即席マジックアイテム。真鍮自体に力があるから、手動的に発動して、ファイアボールを放つ効果

があります。護身用にでも使って下さい」
説明を終えると、ルイズはまじまじと右手中指にはめた指輪を眺めている。
「へぇ～コレにねぇ…」
あれ？何だかルイズの顔が赤らんでるな？こりゃまだ怒ってるな…

side out
勘違いするシル。喜々揚々なルイズ。果てしなく平行線な二人。
しかし、彼らは知らなかった。この会話はカリーヌ様には筒抜けであった事を…
いや、シル場合は冷静じゃなかったから分からなかった…というべきであった。

「なる程、そうでしたか…」
カリーヌは裏のある笑みを浮かべ、床についた。

「物は試しね。使ってみても良い？」
好奇心たっぷりの笑顔を浮かべ、ルイズは指輪を見入ったまま言った。
「良いですよ。その指輪はルイズさんへのお詫びの印ですので…」

シルは苦笑しながら、答える。そして、こっそり…ディテクトマジックを使用しました。
ルイズはそれに気づく事無く、右手の指輪を岩に向けた。

ｓｉｄｅシル
数瞬の出来事だった。指輪から炎が放たれた。
正直、ルイズに使えんの？とか考えてました。
流石は、烈風の化け物の娘かつ…爆発の虚無使い。炎が何か分からん力に包まれ、着弾と同時に爆発。岩が粉と化した。

「…また失敗かぁ」

いやいや、そうでしたか…失敗ですか？僕にゃあ強化された気しかしないのですが…。
「あれが失敗ですか？」
「う…うるさいわね」
「いえ、失敗ではない。そう思うのですが…」
「なっ…何がよ！また爆発したのよ！？あれが失敗じゃないなら、あれは何だって言うのよ！！」
少し声を荒げて、息絶え絶えに叫ぶルイズ。とりあえずうっせぇな。
違うっつってんだろ？全く、俺の方が精神年齢は上なんだぞ！…知らんだろうけど。

「魔法は失敗したら、通常何も起こりませんよ？それに爆発が起き、尚且つ…岩が粉々に砕け散る程の威力！それが失敗？俺には分かりませんが？」
ルイズは考えている様子。まぁ七歳位だからな…無理もないか。
「あれが何かは分かりませんが、ディテクトマジックと見た限りの感想ですが…あれは何らかの力が作用し、強化されている。又は、爆発が付加されていると思います」
「えっ…じゃあ私は？」
「恐らくは、何らかの力が作用し爆発していると思いますね。それに、あの岩が粉々になる威力です。こと、破壊力においては、俺より遥かに上です」
「……でもコモンマジックも使えないのよ」
「使えなくても大丈夫さ」
「大丈夫な訳ないじゃない！」
「大丈夫です。分かんない奴は、爆発でぶっ飛ばしたら良いんですよ」
「そんな簡単な問題じゃないわ。私が魔法を使えないのが悪いのよ…」
「…直ぐに分かるとは思いませんよ。とりあえず、夜も更けてきました。俺はそろそろ寝るとしますから…領内とはいえ、外で一人は危険ですからご足労願います」
今や、辺りに光は無い。まぁ…大丈夫でしょうが、迷うのが怖いからルイズといるが得策か？
まぁ…一応ついてきてるし…大丈夫だろう。

「ふふふ、面白い。面白い考えですシル。なら次から私も本気で訓練させるとしましょう」

部屋の中、女性が笑う。テーブルには、現役時代に愛用した『仮面』が置いてあった。

第七話『訓練2日目～強きモノ～』（前書き）

この話より、オリキャラが一人出現します。
原作好きの方、申し訳無いですが…怒らないで下さい。

第七話『訓練2日目～強きモノ～』

ｓｉｄｅシル

ども、シル・ド・グラモンです。

一夜開けたら、シャンデリア。いやはや、多分慣れないですよ。

「お初にお目にかかりますシル様。私、ヴァリエール家が執事、ジェロームと申します。お食事の準備ができており、奥様方がお待ちです」

丁寧に礼をしてくれる執事。まぁ…悪い気はしませんが……

待たせてると？マズい死亡フラグが…

「わかりました。ジェロームさん、直ぐに行きますので少々待って下さい」

「ごゆるりと…」

いやいや…死ねって事？ゆったりしてカリーヌ様のお怒りを買いたくない！！

あわせて２０と数年。そんな儚いような命…ってこんな事考えてないで急ごう！

「では始めましょうか？」
カリーヌ様の一声で始まる威圧感たっぷりのお食事。それはいやだが…あれはカトレア様かな？
ああ美味！美味！美味～！
やべぇ！美しすぎる！！可憐な上にあの双子山。女神とは知っていたが、正に神だよあの御方は！

「…どうかしましたか？シル」
「いえ、あの御方は？」
「私ですか？申し遅れましたシルさん。私は、カトレア。カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンティーヌです」
「いえ、こちらこそ申し遅れました。私はシル・ド・グラモンです。以後お見知りおきを…」
とりあえず、面識はできた！
「シル。食事が終わり次第、庭で訓練を行います。遅れないように！」
「はっ！了解致しました！！」
ゆったりさは無く、強力な殺気が飛び交う中、食事は終了した。ルイズも、カトレア様も一切喋る事はなく終わった。
どんだけ恐れられてんだよ！てか、娘二人が震えるって…どんだけ何だよ。

「…終わりましたね。杖は持ってますね？早速逝きましょうか？」
「ちょ！カリーヌ様変換違いますって！！」
そう言われると、俺は右腕を掴まれて引きずられて行きました。てか、スルーされたよ…。
おい、ルイズ！カトレア様！合掌してないで助けて～お願いです！死にたくないよぉ～

何で、また模擬戦何だろう。
基礎練にして！…まだ死ぬ率が低いから、てかルイズとカトレア様！見に来てるなら助けて下さいよぉ！

「では始めましょうか？」
杖を構えて佇むカリーヌ様。威圧感がビリビリと感じ、立っているだけで息苦しくなる。
「はっ！お手柔らかにお願いします」
一礼した後、杖を構える。乾いた風が横に過ぎ、辺り木々がざわめいた。

side out
ピタリと風が止む。同時にシルの杖から光が溢れ、杖を降る。
「クリエイト・ゴーレム！」
地面から巨大なゴーレムを生み出す。カリーヌは佇み、未だ動こうとしない。
ズシンズシンと歩き出すゴーレム。カリーヌは溜め息混じりに言葉

を投げかける。
「私には、ゴーレムなぞ通用しませんよ…ウインド」
風が吹く、カリーヌの周囲を回り、鋭く一風がゴーレムをすり抜けて真っ二つに切り裂いた。しかし、シルにはその光景を目視することはできず、ゴーレムが崩れ落ちる所をただ見ているだけだった。
「ちっ…マジかよ！」
「呆けている場合ではありませんよ！エア・ハンマー！！」
ほんの少し言葉を漏らしている間に、カリーヌはシルの目前に立ち、杖を振るう。大気が圧縮され、押しつぶすように襲いかかった。

――直死の魔眼――

シルはブレイドを使い、大気に圧縮されたエア・ハンマーの線なぞり、切断した。
「やはり、やりますねシル…あの時と同じく、ブレイドで両断するとは…やはり、貴方は危機に直面すれば強くなるようですね。なら、本気で行きますよ！」
そういうと同時に、カリーヌは距離を取り、杖を振る。

「…遍在か」
見渡すと３０は軽くいた。シルは、ゴクリと唾を飲んだ。危機に直面って言った？そんな表情を浮かべ、状況を確認する。
（ちっ…絶対勝てない。でもあの感じ、逃げれない！ごめんセラ。兄ちゃん帰れないかも…）
膨大な精神力を込めるカリーヌｓ。杖はバチバチと音を立て、死を連想させる程の強力な風で、大気と地面が揺れる。
「エア・ストーム！」
２０メイルは軽くあろう竜巻×３０が発生し、前方方向に地面諸共巻き上げていく。岩は砕け、木々を粉々に吹き飛ばす。
じりじりとにじり寄る恐怖。シルは右手に杖を構え、精神を集中す

る。
（逃げちゃダメだ…逃げちゃダメだ…逃げちゃ…ダメだ！）
「ブレイド！」
某少年のセリフを思い出しながら、彼は右手の杖でブレイドを唱える。
「見えた！」
――直死の魔眼――
エア・ストームの線を見切り縦、横、斜め…縦横無尽に切り裂き、徐々に間合いを詰める。
シルはブレイドを解除し、杖を構える。
（無駄かと思うが…このままじゃ同じだ！）

杖が光り、膨大な力が溢れ出す。最初にコモンマジックを使った時と同じ感覚をシルは感じた。
（これなら…いける！）
「大地に秘められし、破壊の力よ！」
（何でしょう？この感じは…しかも口語という事は…コモンマジックで私を止めるつもりか？面白い…見せてみなさい！）
杖の光りが帯状に広がり始めた。膨大な精神力が奪われるような感覚と共に、杖がさらに輝きを増す。
「グランバニッシュ！」
某しっぽたちの運命２の土の最強晶術。
地面が鋭く揺れる。カリーヌｓは足下を捕らわれ、地面が割れると共に石礫が襲う。

「…できた！どうだ！流石に少しは効いただろ！？」
シルはガッツポーズと共に、杖を前に出した。目前には岩やら石やらが山積みになり、遍在は消え去っていた。
しかし、鋭い風が吹き…岩や石は粉々に砕け散った。
そこには、ドレスの埃を払う存在があった。

「む…無傷！？」
「私に埃を付けたのは、親以外では…貴方が初めてですよ？聞いた事の無い魔法ですね…」
某宇宙最強様と同じ台詞を言ったカリーヌ様。傷一つ無いだけで無く、埃も少々ついていただけ…
慌ててシルは杖に力を込める。

「大地に秘められし、破壊の力よ！」
「確か…グランバニッシュでしたね。一度見た魔法は私には通用しませんよ？」
「やってみなきゃ分からない！グランバニッシュ！！」
（先住魔法でしょうか？いえ、先住魔法とは違いますね…性質とか根本的に…）
再度、放つ。しかし、カリーヌは悠然と佇む。風が舞うと同時に吹き上がった無数の石礫は、シルに弾け飛ぶ。
シルは瞬時に杖を振るい、早口でルーンを読み上げる。
「ファイアウォール！」
火の壁が燃え上がり、石礫を遮った。
シルは一息吐く、しかし、目前のカリーヌの姿は杖を既に振り下ろしていた。
（マズッた！）
考えると同時だった。一陣の風と共に、浮遊感に包まれ、後方の岩に叩きつけられた。
「ぐはっ！！」
軽く、速度が落ちた。手加減したのだろうか？しかし、シルの意識は朦朧としており、立つのがやっとだった。
「まさか…もうおしまいなどと申しませんよね？」
ゆったりと佇むカリーヌ。手加減したのは間違いなく、この程度で戦闘不能に成らないことを理解していた。
一度目の訓練で見切っていたのだ。

「まだ…だぁああ！」
「もう止めなさいよシル！お母様に、これ以上挑んだら死んじゃうわ！？」
「小さなルイズ…良く見なさい。彼の眼を…」
カトレアはゆったりとルイズに諭している。
「眼？」
「例え、お母様…いえ、烈風のカリンとはいえ、負けたくないのよ……だから私も止めたいけど、止められないわ」
「でも！」

二人の会話が終わるや否や、シルは前に駆け出す。
「うぉおお！」
ブレイドを唱え、カリーヌに走り出す。カリーヌも杖を構え、迎撃体制をとる。
「エア・カッター！」
杖を振り、地面にカマイタチが走る。いや、地面を斬ったと言った方が正しいか？
シルの真横の地面が切り裂かれ、シルは冷静さを取り戻した。
（ダメだ！迂闊に攻めたら返り討ちだ…）

「止めて！お母様…シルが…シルが…」
ルイズの懇願と共に、上空より仮面を付けたモノが舞い降りてくる。
「カリーヌですか？久しいですね…」
「…やっと来ましたかフィルナ」
カリーヌはニヤリと笑顔を浮かべた。その時、シルは凄まじい悪寒

を感じた。

「今から行くからね！待っててよ…死んじゃやだよ！！」
ヴァリエール上空に向かう…もう一人の影。泣きそうな表情とは裏腹に、右手の杖を強く強く握り締めていた。

第七話『訓練2日目～強きモノ～』（後書き）

前話で最後にうっすら登場です。
てか、ごめんなさい。
理由はあるのですが稚拙なもので…勘弁して下さい。

第八話『真実』

ｓｉｄｅシル

絶賛死に死に中のシルです。
いや、そもそもフィルナって誰？知らねぇし…原作にもいなかっただろ？
てかこの悪寒止めてぇ！！
「ふ～んアンタがグラモンとこの？私はフィルナだよ」
いや明らかにさっきと口調違うし、てかファミリーネームは？
「はい、フィルナ様。私はシル・ド・グラモン。シルとお呼び下さい」
「はい、ご丁寧にど～も、おシル。」
何か…丁寧に言ったのが馬鹿らしくなってきた。てかお汁だと…？
「フィルナ？…お母様の知り合いかしら？」
「ルイズ知らないの？…爆炎のフィルナと呼ばれ…お母様と同じ、伝説のメイジよ」
「ほ…本当なのですか？ちぃ姉様！」
ばっ爆炎！？しかも伝説のメイジ！？つまり火のメイジ…１００％スクウェアクラスだよな。
「そうよ！カリーヌの子供たち。私は爆炎のフィルナだよ」
軽っ！！ってか何！？威圧感が無い。いや隠してるのか？
「オホン。フィルナ？どうしたのですか？こんな所に…」
いやいや笑ってますし…カリーヌ様、うっすら笑ってますから！
「いや、シルって子が面白い…って噂聞いてさ、飛んできたんだよ」
文字通り、飛んできましたが…そりゃマズい。死亡フラグが加速していく…。
「ごめんねカリーヌ？お楽しみの所悪いけど…混ぜてね？」
いやいや、バリバリその気満々でしょ！？

「仕方ありませんね…二人では無理でしょうから、貴方が殺りなさい」
ちょい待て！殺すになってる！？なってるから！
「は～い！」
良い年のオバハンだろアンタ！何ガキっぽい事してんねん…マズいぞ…ノリで殺されかねん。
「行きますよ！？ファイアボール！」
あれっ？おかしいな…ファイアボールって２０メイルもあったかな？マズい死ぬ！？
――直死の魔眼――
「ブレイド！」
シルはブレイドを唱え、ファイアボールを横薙に切り裂いた。轟音と共に周囲が焦土と化し、炭がちらほら見える。
「へぇ～やるじゃんおシル！」
「シルです！」
「いやいや『お』をつけたんだから丁寧でしょ」
「フィルナ…名前に『お』を付けるのは丁寧って訳じゃないのよ…後で『お話』しましょう」
「…サーイエッサー！」
軍隊式の敬礼？うっ…美しい。こんなキレイな敬礼…見たことない。フィルナ様の体が小刻みに震えてる気がする。
「君の名前の性で…カリーヌに怒られちゃったじゃないか！」
「関係ないでしょ…てかそれは貴方の間違いでしょう？」
呆れながら言っていたら、フィルナ様は杖を強く握る。あれ？マズいかな。
「うるせぇんだよ？たかが…土のトライアングルごときが…調子扱いてんじゃねぇよ！？」
あれ？暴走？マズい…コレ死ぬ！？
「食らえ！爆炎！！」
空気中の水蒸気を気体状の燃料油に錬金し、空気と攪拌して点火。

範囲内の酸素が燃やされていく。更に爆発に近い衝撃が起き、体が後方に吹き飛ばされる。てか下手すると自分も巻き込むよね、コレ。
「ごほっごほっ！よくもやったな！？」
「ぐっ……やって…ませんよ」
「嘘だ！」
「くっ…ヒーリング！…嘘じゃないです！！」
くそっ駄々っ子かよ…オバハンの癖に、てかカリーヌ様もニヤニヤしてないでフォローして下さい。
「そなの？じゃあ良っかな？」
ズルッと転けそうになっただろうが！何じゃいこのオバハンは！！
「分かって下さり、何よりです」
俺はゆったりと礼をする。
フィルナ様は杖を上段に構え、俺は杖を下段に構える。フィルナ様の杖先に、力が零れる様に溢れ出した。
「ファイアゴーレム！」
杖を振ると炎の巨人が…ってデカ！５０メイルはあるぞ！
「ファイちゃん。踏み潰せぇ！」
やべぇ暴れ出した！いや、良く見ると…フラダンスしてる？
「ファイ…ごらぁ！主人の命令くらいちゃんと聞けや？」
んっ？何か危険な言葉が聞こえたような…気のせいだな。
話すと同時にこっちに走ってくる。
仕方ない。直死の魔眼でやるしか…
「ブレイド！」

――直死の…

「遅いよ！」
鋭くパンチが来る！マズい避けきれない…線をなぞる事も！
「うわぁああ！」

「お兄ちゃん！」
幻聴かな？妹の声が…聞こえてくる。
「よくも…お兄ちゃんを…許さない！！」
ああ…幻聴でも、幻覚でも…頼むセラ。
「セ…ラ…逃げろ…」
「お兄ちゃん！？お兄ちゃん！！」
俺は薄れゆく意識の中で、淡い光が自分を包んだのが見えた。

ｓｉｄｅセラ

最初は、お兄ちゃんの事だから…大丈夫だと高をくくっていました。
でも目前には、巨大な炎に殴り飛ばされたお兄ちゃんがいた！
「お兄ちゃん！」
飛んだ先には岩！嫌だ。お兄ちゃんが…死んじゃう。そしたら、カリーヌ様が魔法でクッションを作って衝撃を和らげてくれた。眼を見ると声に出さなかったが、殺気は無いけど威圧感が襲ってきた…だけど…自然に言葉が出ていた。
「よくも…お兄ちゃんを…許さない！！」

鋭くフライで急降下して、着地。お兄ちゃんを見るとそこら中、生傷だらけだった。
「セ…ラ…逃げろ…」
「お兄ちゃん！？お兄ちゃん！！」
事切れた様に喋らなくなった。全力でヒーリングをかけ、更に水の秘薬を使用した。淡い光が包んだからもう大丈夫。傷が無くなり、すやすやとお兄ちゃんは寝息をたてていた。

「これが、おシルの妹さんか？カリーヌから聞いてたけど、結構可愛いね！」
「煽てなんかいらない。昔、私を守ってくれたように…今度は私がお兄ちゃんを守る！」
杖を掲げた後、正面のオバサンに杖を向ける。
「ははは、言ってくれるね？そこまで言われたら、まるで私が悪役みたいじゃないか！」
「十分に悪役ですよ…フィルナ様」
ルイズの声が聞こえた。レビテーションでお兄ちゃんをルイズの近くに寝かせた。優しい感じの方がいるし…大丈夫だよ。アピアーで見る限り心配してるし…

side out
「お兄ちゃん。待ってて！必ず勝つから！！」
「止めなさいセラ！あれは伝説のメイジよ！勝ち目なんか…」

ルイズの言葉は、セラの眼光で遮られた。
（何よ？全てを見透かされた感じ？まるで…ちぃ姉様みたい）
「神様。私に力を…そして勇気を下さい！クリエイト・ゴーレム！」
杖先の光が広がり、３０メイルを越すゴーレムが生み出された。ファイアゴーレムとセラのゴーレムはガッツリと手を組んでピクリともしない。
「互角ね！セラちゃんは凄いね…ファイアボール！」
杖を前方に向け、フィルナは火球を放った。セラは突然の事に動揺し、避ける間もなくファイアボールを直撃した。肌が多少焼け、白い肌を軽く焦がした。
ゴーレムにおいては、足以外が吹き飛び後方で灰と化していた。
「…何故？クリエ…イト・ゴーレムをつかって…何で魔法が！！」
「このゴーレムは自立型だから、供給なしで動くからね」
しかし、セラはアピアーを使っており、嘘は分かる。実際は杖が二本あるだけ……単純だが、膨大な精神力がなければできない事であった。

ｓｉｄｅシル

冷たい。何だか…寒いな…
眼を開けてみても、真っ暗で何も見えない。光を探して見るが…粒すら見えない。
一体暗闇で俺は何をしてるんだ？
分からない…

わからない…

ワカラナイ…

ｓｉｄｅセラ

このままじゃダメ。

相手の方が、身体能力も魔力も経験も上。勝ってるのは…胸？多分Ｂだから…よし！ちょっとガッツポーズ。

うん。とりあえず…落ちつこう。

相手のペースに入っちゃダメよ。何とかこっちのペースに乗せないと…

そだ！…アピアーがある…ならコレを使えば！

私はそう思って、両手で杖を持ち、胸の前で握り込んだ。

杖先に集中。空気中から水を集めて圧縮。水滴程度の大きさを保ちながら、ピンク髪の人と…仮面のオバサンをアピアーで見る。
（何の魔法だろう？見てみたいし…待つか）
仮面ババアは大丈夫そう…
（少々やりすぎたか…だが、男がこんな事で気絶してい……）
とりあえず、ピンク髪ババアは殺！お兄ちゃんを何だと思ってるの！
でも目前からだ！仮面倒した後にピンク髪だ！
でもそうこうしてる内に、十分に溜終わった。水が溢れ、膨大な水滴ができた。
「アイシクル・スピアー・インフィニティ！！」
水を前方広範囲に展開。そして、水滴を前方に大量発射し、それを長く槍状に凍らせる。
速度をより速く加速させ、仮面を攻撃！
「へぇ！見たこと無い魔法ね！でも…ファイアウォール！」
前方に炎の壁が出現して、アイシクル・スピアーが溶けた。仕方ないから、残りは左右に展開。空中に停滞させる。
そして無数の槍が、仮面を囲った。
「ありゃりゃ、囲まれたか？」
全く、余裕綽々ね。
こうなったら、一斉に！
「仮面を収束せよ！」

無数の槍で、仮面を縦横無尽に襲いかからせる。土煙の中に入り込み、見えなかったが…手応えはあった。倒せなくとも、ダメージは与えた筈だ。
「どう！？少しは効いたでしょ？」
ふとルイズさんを見ると、こっちを見ている。驚いたみたいね！
「ふぅ…私に効くとお思った？お生憎様！ファイアボール！」
火球が無数に襲いかかってきた。アピアーで先読み。
右！左！しゃがんで…飛んで、正面！

軽々と私は避けていく、杖先に力を込めて……

放つ！

「ジャベリン！」

槍状の氷を発射した。しかし、前方のファイアボール３発の前に蒸発して消えた。

「…やるじゃない」

「貴方こそ…ミス・グラモン！」

やっぱり、お兄ちゃんみたいな戦闘能力じゃないし、心理を見ても体が追いつかない…

それに、古流剣術を習ってたお兄ちゃんは体力があって…私には……

「ふふふ…なら、フレイムボール！」

火球が飛ぶ。いや、違う追尾機能付き？避けれない！１０発は回避できないわ…

「錬金！アースウォール！」

土の壁を錬金した。厚さは１０メイル…私の限界。これで防げなければ……

しかし、壁は粉々に砕け散り、私は死を覚悟し目を閉じた。

ごめんね…助けられなかった…

好きとも…言えなかった……

その時、浮遊感が襲い。ビシビシと何かを感じた。後方に爆発が起き、目を開けました。

「……フィルナ様。俺は、俺は仕方ないと思ってました。死の訓練も…でも妹を殺そうとした貴女を許しません。例え、ブリミルが許

しても…いや、神々が許そうとも…俺は貴女を許さない！」
お兄…ちゃん？違う何かが違う。大らかさがない。
血のように真っ赤な紅蓮。そんな色…

「セラ。ごめんな…俺の性で…」
すっと撫でる指、顔を見て、淡い光が私を包んだ。痛みが消えた？
水の秘薬も無いのに…

ｓｉｄｅシル
真っ暗だ。嫌だ！
死にたくない…
死にたくない…
シニタクナイ…

でも、妹が…。
『どうしたんだい？』

前にもあった光景だな。ウザい顔が見える。
『ふふふ、まぁ…気にしないでおけよ』
気にするわ！
『……気づいてるとは思うけど…本当は君たちにはもう一つずつ力がある』
てか無視かよ……まぁいいよ。気づきはしてた。何の力だよ？
『その覚悟じゃ教えない。でもシル？意地悪じゃないよ…その力は強すぎる』
力…でも俺は…守りたい。
『何をだい？』
大切なモノを…妹を…多分、これから災厄にも見まわれる。
『……』
俺は守りたい。これから戦いが始まる。古流剣術を習ったのも、誇示の為じゃない。大切なモノを…もう一度失いたくない…
『覚悟は聞いた…今から意味を理解させる。だが、これは覚えておきなさいシル』
何だよ…クソ神。
『まぁいいよ。今回は…無礼だが許してやる』
……
『強い力は…君を内側から魅了する。捕らわれるな。強く気高く生きなさい…』

分かった。肝に命じとくよ。
『後、セラにももう一つの教えてあげて……俺は多分死ぬから』
えっちょっと待て！神が死ぬのかよ！
『君らに肩入れし過ぎたからね。多分消える』
それでいいのかよ…本当に良いのかよ！
『良いよ…だって俺…長く…生きすぎたから』

ディ…ディムロス！
『某尻尾の突撃中将にするなよ……じゃあな。あばよ』
2回別れを言うなよ。クソ神…

そして、俺は光に包まれていた。
流れ込む膨大な情報。今までの俺たち、古葉直人としての時に、神が見た記憶。
シル・ド・グラモンとしての時の記憶もあった。
脳に刻むように、能力が説明されていく。

目を覚ましたら、カトレア様。ゆったりと穏やかに微笑まれた。
立ち上がると、目前からルイズが涙を零しそうになってる。
目前には、土塊の壁で守るセラ。その前には十発のファイア…いや、フレイムボールか？
マズいな。こうなったら、使うか『アレ』
瞬間的に足を蹴る。古流剣術の一つ、縮地。相手の間合いに侵略するがごとき歩方。
土塊を破壊し、セラに迫る炎の点を突き。線を裂く。
轟音と共に、後方に爆発したフレイムボール。明らかに殺傷能力は高く、当たればセラは死んでいた。そう思うと、怒りがメラメラと燃えだした。

「……フィルナ様。俺は、俺は仕方ないと思ってました。死の訓練も…でも妹を殺そうとした貴女を許しません。例え、ブリミルが許しても…いや、神々が許そうとも…俺は貴女を許さない！」

自然と口にでていた。そしていつの間にかセラを抱き上げていた。

アレ？まっいっか？

とりあえず…

「セラ。ごめんな…俺の性で…」

謝った。でも両手を胸に当てて、首を左右に振った。

「シル。貴方、雰囲気が変わりましたね？」

カリーヌはそう言ってきた。

「すみませんが俺には分からないです」

「そうですね。ではフィルナ」

カリーヌはそう言うと、フィルナは杖を振る。

「ファイアボ…」

「遅い！」

「が…はっ…」

縮地を使い、ナイフの柄で鳩尾に一撃。フィルナは酷い痛みを伴い、苦痛の声と共に倒れた。

「殺しはしない。訓練だしな」

淡々と言い放ち、悠然と立ち尽くした。

すると、フィルナのは人形と化した。

まさか、スキルニル？いや…でも、おかしいだろ？

「ふふふ、私の眼に狂いはなかった。ではシル？『本当』の模擬訓練を開始しますよ」

「えっ！？本当のって！」

待っていたのは…『地獄』だった。

第九話『思惑・成功・模擬戦』

ｓｉｄｅシル

俺は、杖を持つ。只今、絶賛死に死に中。
目前には、烈風の名に相応しい風が行き交っていた。
ビリビリとした威圧感で息苦しい…
何でこんな事に…つくづく運がないな…

―数時間前―

いやぁ…まさかフィルナが人形だったなんて…
しかも、今はお昼を食べてるから…終わったら訓練再開みたい。
「お兄ちゃん、私…」
「気にするなセラ。俺は訓練してるだけだから…」
いやぁ、視線が痛い。くっつかないで…お願い。しかも、猫のようにゴロゴロしないで～！
『嫌！やっと、お兄ちゃんとのんびりできるのに！』
『だから、全訓練終わって…家に帰ってからでも…』
『……お父様は、お兄ちゃんを婿養子に出すって言った。だから…だから…』

ヘッ？アレコレ、訓練ジャナイノ…
『確かに…そういや養子がどうこう言ってたな…』
俺はムシャムシャと食べながら答える。

『もぅ…テレパシーとはいえ、食べながらはマナー違反だよ。それにお兄ちゃんの問題なんだよ？』
セラは呆れていた。
まぁ…呆れもするか、だが…成り行き任せだな。多分もう手遅れだし…
『多分、何とかなるだろ。家に帰らん訳はないだろ？荷物は置いてあるし…』
『手遅れだと思ってるでしょ…もぅ！』
アピアーって反則だな…バレバレだし…
「食事は終わりましたね？待たせる訳にもいきませんし…」
カリーヌ様はゆったりと立ち上がり、俺を引っ張っていった。
セラは顔を膨らましながらついて来た。ルイズとカトレア様もゆったりと付いてきていた。

アレを作るべきだな…どうせアピアーで聞いてんだろセラ？
『聞いてるよ。でも大丈夫なの？』

『心配ない。杖は手慣れたモノの方が使いやすいからな』
『じゃあ…時間が余った時に…』
『分かった』
（もぅ…いつも真面目ならかっこいいのに…）
んっ？まぁいい…とりあえず、二人で作れば失敗は無いだろう。

引っ張られながら、俺たちは庭に向かった。

side out
シルたちは庭に立った。悠然とした風に包まれながら、カリーヌを待っていた。
「お母様、遅いわね」
ルイズがポツリと呟いた。いつの間にかカリーヌは居なくなっていた。
「…今の内に錬金しとくかな？セラ。手伝って！」
「うん。分かった」
岩をレビテーションで持ち上げ、錬金。
地面に、床と炉を作り出した。
土から砂鉄を取り出し、玉鋼を錬金し薄く打ち延ばして…水減しを行い、小さく割り、小割を行う。
「何してるのよ？」

ルイズが気になったのか聞いてきた。
カトレアもゆったりと、見て「あらあら、まあまあ」と一言。
「お前には関係ない」
「何でよ！」
シルはぷいっと首を振り、鍛錬に戻る。その様子を見かねて、セラは口を開く。
「お兄ちゃん！…ルイズさん…私たちは武器を作ってるんです」
「武器？」
「ああ…『刀』を作ってる。東方に伝わる剣だ」
いやいやながら、シルは言葉を返す。
「刀…ですか？」
カトレアはそう言うと、シルは視線を炉に移し、玉鋼をレビテーションで入れていく。
「そうです。刀は形状から斬撃、刺突…双方に特化した剣です。それを杖と混ぜ、杖として行使します」
「でも杖は契約を行い、慣れていなければ満足に行使できないんじゃないの？」
ルイズが又話に入ってくる。セラはにっこりと笑顔を浮かべ、シルはため息を吐く。
「お兄ちゃんなら、大丈夫です」
「どの道、戦うなら接近してくるだろう。仮に接近されてブレイドを詠唱する暇がなければ…やられるだけだ。なら、何でも使える方が有利だ」
二人は言葉と共に、一つの塊になった玉鋼をだし、エア・ハンマーで台状に伸ばした。
「へぇ…そう作るんだ」
「ああ…本で読んだ程度の浅い知識だがな」
もう一度、錬金を掛けて炭素量と台を平らに延ばし、折り返して2枚になるよう重ねる。そして、セラが石に錬金をかけ…純鉄を作り、新たな玉鋼と混ぜて平たく延ばしていく。

「何だか分からないけど…凄いわねぇ」
カトレアはほんわかと言うが、真剣なシルは気づくことはなかった。

……数分後。

「できた！」
シルは眼を輝かした。前の世界で、居合いをしていた刀に似た形状の杖を作り出した。
赤く輝く刀身、綺麗な波を打つ波紋。大きさは脇差し程度で６歳にはやや大きいようだ。色こそ違えど…日本刀そのものであった。
鞘を腰に差し、試し斬りを行う為に木に近づく。
右半身に構え、右から踏み込み。滑るような摺り足…地面を滑りながら、刀を振り抜く！
…シュン！
風を切る音を聞いた。
彼の剣筋は全身運動を駆使した身軽さを持ち、木をすり抜けるように振り抜いた。
「…注意しなきゃな」
ポツリと呟く。同時に木が右にズレた。
「ちょっと…切れ味良すぎ」

ｓｉｄｅシル

鞘に納めると、木は切断されて轟音と共に倒れた。悠然と立ち、ゆったりと戻る。

セラはわ～いと手を上げて喜んでいる。

ルイズは状況をポカンと見ていた。

カトレアは微笑みながら「あらあら」と言っていた。ってか驚きもしてないか…

「素晴らしい腕ですね…シル！」

突然の言葉に驚き、俺は上空を見上げると、グリフォンに乗った人物とカリーヌ様が浮いていた。

ありゃりゃ…見られたのかな？

「ワルド様！どうしてこちらに！？」

ルイズは大声で叫ぶように声をだした。ああ…耳いてぇ。叫ぶなら場所を考えろ！

…とりあえず、何故ワルドがここにいる？

「おお…僕の小さなルイズ。元気だったかい？」

「はい、ワルド様こそ……」

ルイズたちが色々言ってるが…カリーヌ様が妖笑している。マズい。寒気が……

「はっ！カリーヌ様はどちらに行かれていたのでしょうか？」

「私ですか？私は貴方の訓練相手を連れてきたのですよ」

えっ訓練相手？まさか…

「そうだ。君がシル君だな？僕はワルド子爵だ」

けっ…嫌しやがって、俺は嫌い何だよコイツ。だが、初対面だし堪えるか。

「はい、俺がシル・ド・グラモンです。ワルド子爵」

「君のお父さん…グラモン元帥には感謝しているよ。僕のような者を魔法衛士隊、グリフォン隊へ推薦してくれた恩義もある」

あれ？確か陛下がワルドの父を覚えていて、入隊できたんじゃなかったか？

とりあえず、話を合わせておくか。

「そうでしたか。ならワルド子爵が俺の相手を？」

「ああ…務めさせてもらうよ！」

そう言うと、ワルドは杖を抜いた。

刀を居合いで抜くと同時に、俺はファイアボールを放った。

「ぐはぁ！」

「ワルド様！」

瞬間的な事に対応できなかったのか…爆発に巻き込まれ、吹き飛んだ。

へっ！ざまぁ！！でも効いちゃねぇか。ガードしたのが見えたし…

ルイズは心配したのか声をあげた。

「シル！まだ合図も無いのに…何て事してんのよ！！」

「杖を抜いたんだ…それは戦闘開始の合図だろ？それに、この程度じゃ効かないだろ？子爵」

嘲け笑うように俺は言った。ワルドは立ち上がり、杖を向ける。
「ふっ…不意打ちとはやってくれる。」
（やっぱけろっとしてるか。まぁ…戦いはこれから…ってとこか）
「ユビキタス・デル・ウィンデ…」
ワルドはゆっくり唱える。『遍在』…風が最強たる由縁。
しかし、まだ原作より強くないのか、それとも子供と侮っているのか分からないが…遍在は1人。
どちらにせよ…なめられたもんだな。
鋭く瞳を光らせ、直死の魔眼を発動する。
世界に死が満ちていく。地面にも、ワルド本人、遍在、樹木、岩、ワルドをまとわりつく風でさえも線と点が脈動を始める。姿、形さえあれば、俺は…

神様だって殺してみせる！

「ライトニング・クラウド！」
二人のワルドは左右に分かれてライトニング・クラウドを発動した。
鋭い雷が俺の体を貫いたかに見えたが…
「ば…バカな！」
「む…無傷！」
ワルドたちが言葉を漏らし、固まった。それを見逃さず、縮地で間合いを詰めた。
遍在のワルドは通常より線が多く、凝視すると点も多い。
ドッ…
左手のナイフを点に突き、遍在はボンと音をたてて消え去った。
「刺された程度で遍在が！？」

「…後は、本体のみか！？」
驚いたワルドは杖をフェンシングの構えをとり、防戦を行った。
突きに特化した構えで、突くと同時に詠唱を行っているが…リズムが一定で、さらには魔法に転じる時に間が空く。そこを俺は見逃さなかった。
魔法を翻して避け、下段回し蹴りでワルドを転ばそうとした。しかし、ワルドもバカではなく、後方に跳び避ける。
「誤算ですね…ワルド子爵！ファイアボール！」
俺はそれを読み、下段からファイアボールを上に放った。ファイアボールは、ワルドの顎を持ち上げるようにかち上げると、上空高く爆発した。足が浮いたワルドを前蹴りし、地面に転ばした。同時に刀を突きつけた。

「そこまで！」
カリーヌ様の声が轟き、刀を鞘に納める。
ワルドも立ち上がり、服を払いながら杖を納めた。
ゆったりとワルドに一礼して言葉をだした。
「ありがとうございました。とても良い経験になりました」
本心じゃないけど…とりあえず、礼は尽くさないとね。
ワルドも一礼を返し、ニッコリと微笑んでいた。
…まだレコンキスタとも繋がってないのか？力への渇望も無いのかな？

「見事ですシル。ワルド子爵もお疲れ様でした」
「いえ、お役に立てて光栄にございます。それではこれにて…」
すると、ワルドはグリフォンに跨り飛び上がっていった。
まさか…模擬戦の為だけに呼ばれたのか？
呼ばれてすぐ負けて帰るか…背中に哀愁を感じるよ…

だから言わせて…

けっ…ざまぁ！

月が登り始めた。双子の月にも、慣れて違和感を感じなくなった。
双月を背にカリーヌ様は笑う。強力は威圧感と共に、鋭い眼光が光った気さえした。
「ふふふ、面白いですねシル。スクウェアクラスを防ぎきり、あまつさえ倒してしまうとは…」
見なくても分かる。妖笑を浮かべている。何てことだ…
死亡フラグが立ちきった。ヤリスギタカ…
「では、シル。模擬戦を…」
「お待ち下さい。ヴァリエール公爵夫人」
えっ…まさか？
「模擬戦は私がお受けします。その際、私が勝てば…お兄…兄さんをグラモンにお返し下さい」

ゆったりと悠然と言い放つセラ。この周りの全員が思った事だろう。

『ちょ！？死にたいのかセラ！』

『私は…お兄ちゃんを守りたい…誰にも文句は言わせない！』

『いやいやいやいや…待てぃ！お前はリュックか？俺はユウナか！？弱いのか？』

『このまま戦ったら…お兄ちゃん、死んじゃうんだよ？』

『うっ…痛い所を…でもなセラ。フィルナとの戦いでは…』

「決めました。セラ…と言いましたね？条件を呑みましょう。いつ、どこでやるのです？」

ゆったりと笑うカリーヌ様…威圧感が体を硬直させる。セラは杖を握り締め、前方に掲げる。

「なら今ここで…正義の裁きを受けなさい！」

おい…バカか？カリーヌ様に喧嘩売ったら死ぬぞ！！

「待てセラ！これは…」

「止めないで、私は…負けない。連れ戻すの…」

セラ。涙まで…でも死ぬぞ…死んじゃうぞ…

「では始めましょう…かかってきなさい」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

冒頭に戻る。

烈風が少女を吹き飛ばす。吹き飛ばしたら追撃をかける。風の刃が幾重にも重なり、体を切り裂かれそうになる。
しかし、セラは身を翻して避ける。

―１０分後―

心を読んでセラは攻撃を避け続けた。左右上下、及び前後方。様々な風を避け続けた。
（なる程、違和感がありますね…先を読むような避け方そんな所…なら避けれなければ問題ありませんね）
カリーヌはそう思い、詠唱を始めた。
（っ！！先読みしても当たる攻撃？しかもカッター・トルネードを５発！？マズい…持久戦でも、この展開じゃ分が悪い！！）
「カッタートルネード！」
考えていた間に、カリーヌは詠唱を完了し…カッタートルネードが放たれる。
一つ、二つ、三つ…合計五つの竜巻が一列に並び、襲いかかる。
セラは先に動き範囲外に逃げた。しかし距離が遠く、カリーヌの眼を見る余裕はなく、アピアーを切ってしまった。
左に滑り込むように、倒れ込んで避けた。
（何とか…無様でも何でも…勝ちたい。お兄ちゃんを…連れ戻す！）
杖を握りしめて立ち上がり、杖を縦に構える。
「……」
詠唱を小声で始めた。その後アピアーを使い、眼を見た。
ここで…アピアーを先にすれば、運命は変わっていたのかもしれないが…
（えっ…それって…！！）
気づいた時には遅かった。巨大な竜巻が五つ…セラを囲うように発生していた。じわりじわりと、にじり寄り、中に入り込んだモノ…

木の枝を粉微塵に引き裂いた。
「どうします？このままなら…死にますよ？」
風が邪魔で瞳が見れず、心が読めない。周りを見回しても、もう抜け出せそうも無い。
苦し紛れだが…ジャベリンを放った。
しかし、弾かれ消える。
クリエイト・ゴーレムを作っても、竜巻が高すぎて越えられないのは明らかだった。そもそもこの風の中、それは自殺行為。当然フライもレビテーションも意味を成さない…巻き込まれるのがオチだ。
セラはゴロリと杖を持ちながら、芝の上に転がった。
そして…ふと呟いた。
「私…ここで死ぬんだ…」
双月がセラを照らしてる。
（幽玄に見える双月さん…徐々に霞んできちゃった…死にたくない…死にたくないよぉ…）眼に涙が溢れ、双月が霞む。

（このままじゃセラが…でも教えたくない。アレを教えたら…セラまで俺と同じように……）
「お母様！殺さないで！私の…友人なのよ…少ない私の…」
ルイズは涙を流した。カリーヌは多少戸惑ったが、毅然たる態度を崩さず…ルイズを無視した。
「ちぃっ…！！」
シルは竜巻に駆け出した。刀にブレイドを纏わせ、竜巻を切り裂いた。

ｓｉｄｅセラ
「…死にたくない」
ポツリとまた呟いた。何だか凄く体が熱い。風が当たって、寒かった筈なのに…
『やっぱ…教えなかったか…』
『誰？お兄ちゃん…じゃないよね？』
私の頭に響く声、何だか久しぶりな気がする。

『君に力を与えた。前に渡したが…使えば助かる』
『えっ…貴方は？』
『強く生きなさいセラ…いや…古葉理乃』
そう言われ…理解できた。前の神様…そして、私たちの力。

「竜巻…消えて！！」
瞬間、私の光が弾け…気を失ってしまった。

ｓｉｄｅシル
あのバカ…勝手に来て勝手に死ぬな！
来なきゃ…グラモンで…内政の手伝いしながら平和に暮らせたのに…
「何だ！？」

中心のセラが光を解放した。竜巻は、もみ消されるように消えた。
「セラ！」
心配して駆け寄ったら、寝息を立てて寝てしまっていた。一応ヒーリングで傷を治しておいた。

「流石はシル。この力すら消し去りましたか…」
カリーヌ様は微笑む。俺が助けると踏んで…力を使うと踏んだのか…
「分かった。模擬戦でも何でもしてやる！」
レビテーションでカトレア様の前にセラを下ろした。
「すみません。カトレア様…ルイズ…セラを見てあげて下さい」
「ええ…分かりましたわ」
「セラ…」
二人は優しい口調でセラを見てくれていた。

「では…始めましょう。言っておきますが…今回は手加減しませんよ？」
「そうですか。じゃあ殺し合いますか？カリーヌ・デジレ様！！」

第十話『烈風』

双月が微笑む。微かな綻びを紡ぎながら微睡んでいる。
――時が止まるように。
地面には、二人が対峙している。
一人は少年。刀の柄に手を掛けている。もう一人は、優雅な女性。力を蓄えながら杖を握る。
冷たく乾いた空気が二人を包み、しきりなく風が迷い込んだ。
双方、一歩も動かない。少年は冷や汗をかき、女性は悠然と佇んでいる。
ふと風が止み、合図と言わんばかりに一方が接近を試みる。鋭い音と共に、強く踏み出す。
――少年であった。
「はぁあああああ！」
一瞬に間合いを詰め、少年は刀を払った。しかし、その前にもう女性の姿が存在しない。
少年は後方に気配を感じたのか刀を引き、柄で打撃を加えた。
ｓｉｄｅ少年
（感触が無い。風が吹いてる……マズい！）
強力な衝撃が走り、浮遊感に包まれた。空中で一回転して着地したが、姿が見えない。
「ちっ……なら」
――直死の魔眼――
周りの線を見るが、不審な所が無い。だが、凄く高速に動く線と点が存在した。
「そこかぁ！？」
ヒュン！
空気を裂く音、それだけ力を入れた一撃……だが、それは外れた事を意味する。また辺りを見回した。

「まだまだですねシル。エア・カッター！」
杖が微かに見え、横に跳ぶ。地面を抉るような風に足を掠めたが、まだ戦いに支障はない。
「まだだ……こんなの、ただの掠り傷だ！」
刀を握り直して叫んだ。何だか痛みが引いた気がした。
しかし、どうする？　力の差は歴然。正直、勝ち目は皆無……だが諦めてどうする？　勝機がないなら、作るだけだ！
「クリエイト・ゴーレム」
刀を振り、発動と共に土で数十体のゴーレムを作りだした。そして錬金により、鋼鉄に姿を変えた。
ゴーレムたちを散開させ、カリーヌ様を包囲した。
「ふふふ……確かにこの前は土でしたからね、強度を上げてきましたか……」
じりじりカリーヌ様にゴーレムを近づけた。その時、俺は予備の杖で、空中に無数の氷粒を生みだし、停滞させた。

「全軍突撃！！」
号令と共に刀をカリーヌ様に向けた。ゴーレムが一斉に襲いかかる。その隙に、俺は氷に乗った。
しかし、カリーヌ様は臆する事なく、杖を振りかざした。
「エア・ストーム」
カリーヌ様を中心とした竜巻が発生した。突撃したゴーレムたちは粉々に吹き飛び、ガラガラと音をたてて崩れ去った。

（予想通り。これなら！）

氷を鋭く蹴り、竜巻の中心から急降下した。杖をしまって、刀を両手で振り下ろした。
その時、浮遊感が襲い、上空高く舞い上がった。何とか氷に着地したが、下を見ると竜巻は集束され、飛び込める場所すら存在しない。
鋭い大気が止み。粉々に砕かれたゴーレムが落下した。
「浅はかでしたねシル。上空が死角である以上、警戒するのは当然です」
涼しい顔でした。けど……散りばめた氷を足がかりに、縦横無尽に跳び回った。ついていけないのか動く事はなく、背後に回り込めた。ナイフを取り出し、杖の『線』を断とうとする。しかし、翻して軽々と避けた。その後、またしても浮遊感に襲われた。
「戦略としては――まずまずでした」
鋭く強力な風が杖に集まり始めていた。
「しかし、私は風のメイジ。風と音が、貴方の動きを教えてくれています。それが、貴方の敗因です」
その言葉と共に、俺は意識を手放した。

side out

風が舞う。ボロ屑のように果てた少年と涼しげに立ち尽くす女性。泣きじゃくりながら、少年にヒーリングをかける少女。
そして、それを哀れむかのような視線をした女性と……プルプルと小刻みに震える少女。
重苦しい空気の中、少年は傷を癒えて起き上がる。
「お兄ちゃん！」
「……セラか。世話をかけたな、すまない」
ゆらりと立ち上がった少年は、佇む女性を見る。その間に泣きながら少年の腕に少女がぶら下がっていたが……。

女性は華麗にスルーし、胸の前で腕を組むと、淡々と言葉を出した。
「貴方の実力。見せてもらいました……今日のところは訓練を終了します。
明日は虚無の曜日ですし、休みとします。体力と精神力を戻しておきなさい」
すると、女性はクルリと蹄を返し、屋敷へと帰っていった。
「明日はお休みかぁ……」
「ねぇ……シルにセラ」
呟いた言葉に、何か言葉が重なる。ピンク髪の少女――ルイズが前に立っている。
「何だ？」
シルは単刀直入に聞き返した。ルイズは一瞬びくっと震え、キョロキョロと辺りを見回していた。その様子にカトレアは首を傾げ、セラは未だに泣いている。

sideシル
何なんだ？　このカオスは？
セラは泣きながら俺にぶら下がってるし……
ルイズは慌てて不思議行動してるし……
カトレア様は首を傾げておられる。

さて、この空気を破壊しなきゃ……マズいフラグが立ちそうだな。
「あああ、あの……シシシ、シル？」
どもりすぎだろ？　てか……怯えてるのか？　でも当然なのかな。

普通に考えてみたら、あの『烈風』と戦ってたのが同い年の兄弟……
『お兄ちゃん？　私は妹！』
『すみません』
コホン！　……同い年の兄妹、何だからな……慌てもするか。
てか……妹よ。嘘泣きだったのかい？
『ホントに泣いてるのよ……バカ！』
ああ……妹よ。心で話されたら土下座もできないじゃないか？
「シシシ、シル？」
どもりすぎだって、まぁ……原作でもそうだったが。
「何だい？ルイズ嬢」
「怒ってるの？」
ちっ……うざったいな。
「怒ってませんよ。無礼をお許し下さい」
そう言って、俺は頭を垂れた。ルイズは挙動不審の行動をとり、アワアワしている。
「あらあらまぁまぁ……ルイズったら」
この方には勝てない。そんな気がするな。
さっき一瞬こっちを見られた時、アピアーをかけられたように……見透かされた気がする。
……下手に考えるべきじゃないな。

「二人にお願いがあるの」
「お願い？　私たちに？」
やっぱりか。まぁ……分かってたよ妹よ。
「そうなの。私……魔法が使えないの」
はっ？　言っただろが！　……仕方ない。マジに見せてやるか……そうでもしなきゃ、理解しないんだろうからな。

「この前言ったでしょう？　ルイズ嬢。君の魔法は失敗じゃない」
「でも、どう考えても失敗じゃない！　爆発するのよ！？　させる気もないのに……。

それが失敗じゃないなら何だって言うのよ！！」

「何かは分からない。だけどな、失敗じゃない。今から見せてやるよ！」

知ってるんだよ。俺はお前が『虚無』だって……。
だが、今言ったら調子にのって……遂には戦争の道具に使われる。
下剋上の御輿に担ぎ上げられる可能性だってある。だから……言えない。

面倒だが、失敗を見せたらさぁ……理解できんだろ？

第十一話

庭に佇む少年――シルは杖を握る。杖が輝き始め、力が波打つ様に周囲を霧散し、収束する。
力はルーンの意味により、働こうと動き始めたが霧散して消え始める。
「そのルーンは、お母様の十八番。カッター・トルネード？」
ルイズは目を輝かせていた。しかし、顔は浮かない表情でもあった。

杖が輝きを失い始め、シルの表情は次第に曇り始めた。力が足らず杖の輝きが消え、彼は押しつけられた様にうなだれて、両手を地についた。
爆発は起きず、力は霧散しきっていた。
「なっ……言ったろ？　普通は爆発しないって……」

力から解放されたかのように、シルはむくりと立ち上がり杖をしまう。
息を荒くしていたが、大きく深い呼吸で息を整えていた。
「ホントに爆発しない……」
ルイズは驚愕し、ポツリと呟いた。

ｓｉｄｅシル
時間が経ち、夕食を終えた。
あてがわれた部屋に戻った俺はふらりと体を揺らし、ベッドにダイブした。

（しんどいな……精神力使いすぎたかな？　違うな。体力の方だな）
ゆらりと脳裏によぎった思考。睡魔はなく、ただしんどい。
でも、そうも言えないかな？　頭はまだ働くし、様々な問題がある以上、寝てなどいられない。

side　out
所変わって、ある部屋。
きちんと整理整頓が成された部屋に、多種多様な動物たちがベッドの中の主を心配そうに見ている。
「あらあらまあまあ……心配してくれてるのかしら？　ありがとう。でも大丈夫よ」
主はおっとりとした口調で動物達に言った。しかし、彼らは悲しそうな鳴き声を上げるだけで、一向に離れようとしなかった。

コン、コン。
乾いた音がドアより発せられた。その音に動物達は整列して座った。
「カトレア。入りますよ」
言うより早くドアが開いた。その先には、心配そうな顔をしたカリーヌの姿があった。
「お母様……」
「無理に起きなくていいのよカトレア。寝ていなさい」
いつもの口調ではなく、優しさが前面に出ていた。
「安心なさい。ワルド子爵が、水の秘薬を持ってきましたからね」
そう言うと、カリーヌは水の秘薬を取り出し、カトレアに渡した。

「ありがとう。お母様」
「娘を心配するのは当然の事よ。親なのですから」
カリーヌはニッコリと微笑むと、カトレアは水の秘薬を使った。
顔色が多少ながら戻り、疲れた体が癒されていく。カリーヌは微笑みを止め、ゆったりと言葉を紡いだ。
「ごめんなさいねカトレア。私たちにはこんな事しかできないの……」
「お気になさらず……私は平気ですから……それに他に聞きたい事があるのでしょう、お母様？」
にっこりとカトレアは微笑み。カリーヌは僅かに表情が和らいだ。
ゆったりと歩いて、椅子に腰掛けた。重々しく言葉を紡いだ。
「彼の実力は、私の予想以上でした。戦闘面において……ではありますが、魔法の才能があるのは確かです」
「でも、彼は土の名家グラモン。水にも才能があるのでしょうか？」
カリーヌはニッコリと笑いを浮かべる。
「既に土と水は、トライアングル以上の力を持ったメイジです。5歳の少年だと言うのに……」
「お母様……6歳の筈ですが」
カトレアは笑顔で口を抑えて答えた。反面、カリーヌは慌てていた。
「そそそうなの？　私、勘違いしてたわ……てっきりルイズより年下なのだと……」
「わからないでもないですわ。彼はとても子供っぽい所がありますし……」
「ええ。でも力の使い方がわからないのだと思っていましたが、実際は実力を隠していたのでしょう」
「やはり、お母様もそう思いますか？」
カトレアは何か違うものを見るように、目の色を変えた。
「ええ。私もそう思いました。実力を発揮する場面はしっかりと、単純な危機の場面では……遺憾なくその実力を発揮する」

カリーヌの眼が輝きを増し、口元を手で隠し笑う。
しかし、カトレアは浮かない表情をしていた。
「どうしたのカトレア？　具合が悪いの？」
「いえ、具合は悪くないのですが、シルさんに悪い気がしまして……」
「ふふふ、気にする事はありません。彼も強くなりたいのですから、一石二鳥というものです」
「あらあらまあまあ……」
二人は笑顔を絶やさず、ゆったりと言葉を交わし続けた。

sideシル
何だ？　やけに寒気がするな……
今日はいつにもなく寒いのか？
「お兄ちゃん！　居る！？」
「逆にここに居なかったら、どこにいる……」
突然の来訪者。ノックもせず、特攻してくる。そのおまぬけな発言に、呆れて声が漏れた。
その言葉に怒ったのか、セラは頬を膨らませた。
子供に戻ったから可愛らしいが……前の姿なら変顔だな。
「ぷっ……」
考えたら口から漏れた音。その音に、セラは顔を染めた。
「お兄ちゃん。今この場面で……その、お「勝手に勘違いして赤面するな」」
とりあえず、遮っといた。

side out

空気がのほほ～んと流れる中、シルは真剣な表情になった。
手早く杖を取り出し、シルはディテクトマジックとサイレントを唱えた。
セラは二つの魔法を使用した事で、何を話すかを理解した。
子供の頃、彼らは魔法が使えるようになってから、聞かれたく無い会話は……テレパシーかこの様な形を取っていた。

二人が真剣な表情故に、空気も緊張感に包まれた。
「あの……お兄ちゃん」
「何だ？」
意外にも、この空気を破ったのはセラの方だった。
「髪、切ったの？」
「えっ……今頃言う？　もう皆様方はそんなフラグ忘れてると思うが……」
非常に事務的な台詞と共に、彼は立ち上がり……抗議する。
「お兄ちゃん……皆様方って、誰に言ってるの？」
セラは首を傾げた。
「細かい事は気にすんな」
ゆったりと言葉を紡ぐ。セラは呆れかえり、ため息を吐いた。
「何だよ。俺……何か変な事言ったか？」
「いいよ。仕方ないみたいだから」
セラの瞳には深い光が宿っていた。

「話は変わるけど…お兄ちゃん」

その言葉にほっと一息吐き、シルは言葉を出した。
「何だい？」

第十二話『風の人たち』（前書き）

久々に掲載です。感想を頂き、ありがとうございます。

私の駄文をみてくださる皆様方、ありがとうございます。

第十二話『風の人たち』

僕はジャン・ジャック・ワルド。風のスクウェアでグリフォン隊所属のナイスガイさ！！

今日は、ヴァリエール公爵閣下の願いで良質な水の秘薬を送っている最中さ。

とはいえ、どうやら夫人も用があるらしい。杖持参というし、まさか特訓（ぎゃくさつ）をするのでは……。

命が幾つあっても足らんな。烈風様の特訓だからな……。

とりあえず、ヴァリエール公爵閣下の次女、カトレア様は原因不明の病に犯され苦しんでおられる。将来の姉上様になられるお方だし丁重に接さなければ……。

「ワルド子爵。ご苦労様です」

一陣の列風と共に、僕の前に女性が現れた。

驚いて体制を崩しかけたが、持ち直して頭を垂れた。

「これはヴァリエール公爵夫人。わざわざのご足労を賜り、光栄にございます」

「無理を言っているのはこちらですし、構いませんよ」

流石に美しい。風になびく髪に、佇まい。
そして、控えめな胸！！
ルイズもこの様になるのだろう……うっマズい鼻血が出る。このまま出したら、色々な意味で死ぬ。

「これが水の秘薬です。モンモランシ伯のお墨付きです」
「なるほど、水のモンモランシが推すなら普通より効能がありそうですね。ありがとうございますワルド子爵」
そういうと、夫人が頭を下げた。

「いえいえ、そんな恐れ多い。頭をお上げください夫人……当然の事でございますから」

「それと……杖は持ってきましたね？」
「はっはい！　仰せの通り持ってきました」
僕は、軍隊の最敬礼で質問に答えていた。

なっ……何だか嫌な予感しかしない。眼が笑ってない、空気が凍る、凄まじい覇気。これが【烈風のカリン】か恐ろしい。

「ふふふ、なら良いでしょう。彼に模擬戦で勝負して下さい」

夫人は指を指した。辿ると、少年と少女、うん……良い体つきをしている。好みドストレート！！

「彼ですか？　まだ子供ではありませんか？」

僕は一流の紳士、その用な事は口には出さないのだよ！
とりあえず夫人が【彼】と言ったから、少年の事であろう。
少年は、何か剣の様な物体で木を一閃。僕には分かる、習練……
いや熟練しきった太刀筋。身が凍る思いと軍人としての血が騒いだ。

「素晴らしい腕ですね……シル！」

先ほど隣にいた筈の夫人は、いつの間にか彼の前に立っていた。
慌てて僕はグリフォンを降下させ、地面に降り立ち。婚約者であるルイズと会話を始めた。

うん可愛いよ。僕のルイズ！！

それに、あっちの娘も……僕好みの子！！　うん可愛いなぁ～！！

夫人のお願い（命令）により、僕は彼……シルと戦った。しかし、結果は散々で逃げるようにその場を去った。

「力が欲しい」

ふと呟いていた。僕は油断していたが、正直負ける事は無いと踏んでいた。

でも踏み込んだ場数……経験の違いが僕を敗北に導いた。

六歳の少年に、完膚なく叩きのめされ、僕は傲りを知った。

待っているがいいシル。次は手加減しない。実戦のつもりで行かせてもらうよ。

……何だか凄くバカにされた気がする。

――時もどりし望の霊――
ｓｉｄｅシル

「何だい」

何となくお茶を作っていたが、一瞬鋭い感覚が蘇った。

『待てセラ』
『ほぇ？　どしたのお兄ちゃん？』
『俺たちのサイレントじゃカリーヌ様には筒抜けだ！　奥義は撃つなぁ！！』
『う～ん確かにそだね。でも、奥義って天翔龍閃何か使えないよ』
『知ってたか、だから適当に話しながらこれでマトモな話をしよう』
『りょ～かい』

その間は1秒かかっていない。素晴らしい早技であった。

自画自賛だけどね。

ゆっくりとお茶を啜る、セラは溜めた口を開いた。しかし、その内容が世にも恐ろしいモノであった。

「お兄ちゃんはカリーヌ様をどう思いますか？」
『お兄ちゃんはカトレア様の病状どう思います？』
「はぁ？」
『突然その台詞は酷くない？　まぁカトレア様の病状は、多分永続天使性無機結晶症かな？』

爆弾を投下した。思ってる考えは良いが、それは最悪な答えだ。ナニダイ妹ヨ、俺ニシネト？

テレパシーの内容を聞き呆れ顔になったセラが答える。

「はぁ？　じゃないよ。カリーヌ様を師匠としてどう思うのか聞いてるの！！」
『カトレア様が、クルシスの輝石持ってるとでも？　真面目に考えてよ！』
「なるほどね。

カリーヌ様は、やっぱりとても強くて貴族の鏡の様なメイジだね。華麗でカッコイイし、烈風のカリンに鍛えて頂いて光栄の極みだよ。お陰で、セラと同じトライアングルになったしね」

『ならそっちは言葉を真面目に考えろ！

会話は聞こえる可能性があるし……

迂闊な会話が死につながるの分かってるだろうが！』

俺の心底の叫び。しかし奴は瞳に光を消し、心の無い笑顔でテレパシーを送ってきた。

『だが断る！』

『それどこで覚えやがったぁあああ！！！？』

鼻歌混じりの聞こえないふりをされ。俺たちは夜更けるまで語り合った。

その時、俺は知らなかった。

「ふふふ」
「お母様？　どうされましたか？」
「いえ、何でもありませんよ。体に障りますから私は戻ります。ゆっくり休みなさい」
「わざわざありがとうございますお母様」
「良いのですよ。ゆっくりお休みなさい」

（ふふふ、シルがそう思っていたとは……安心なさい。すぐスクウェアにしてあげますから、明後日の訓練プランを練りましょうか）

悪寒を感じたその時の俺に知る余地はなかった。

第十三話『波乱万丈虚無曜日　前編』

朝の光に小鳥の声……う～ん、実に清々しいね。

隣のベッドでセラが寝ていた。前の世界でも寝坊助だったが、目覚ましの無いこの世界では、最悪の寝坊助習慣となり、起きる気配がひとかけらも無くなった。スースーと可愛い寝息を立て、幸せそうに眠っている。

起こすのも可哀想だな。ジェロームさんが来るまで寝させておくか。

「……だめ……」

んっ？　起きたのか？　まぁまたアピアーだろうが、分かったなら感心感心。

「……だめよぉ～～お兄……」

「そうだな悪かった。起きなきゃダメだもんな。分かるなら自分で起きてみようか」

ゆったりと優しく声を掛けた。

「いや、そんなとこ触っちゃ……」

突然の変な発言を疑問と思い、セラを見ると目を閉じている……って寝てんのかい！？

当然その時、セラには指一本触れてはいない。

さらにセラはたたみかけるように言った。

「だめ、だめだってばぁ……ばかぁぁ……」

「このバカ妹。一体何の夢を見てるんだか……」

『……とでも言えと？

起きてんだろ？　箒に乗った幻想曲のキャラクター真似してないで、とっとと起きやがれ！！』

『何でバレたの……』

そりゃネタ使ったらバレバレだ。そしてどこで覚えた？

この通り、俺たちは兄妹で同じ部屋に居る。
カリーヌ様が言うには子供だし、駄々をこねられるかもしれないと思ったらしく、兄である俺となら大丈夫だ……と判断したらしい。

今日の訓練はお休み。虚無の曜日様々だ。
なら、セラと街に行って二人の力を確認するのも悪くないかな？
俺の力はともかくとして、セラの力は色々調べなければ危険性があるかもしれないからな。

……にしても、あの会話はヤバかったな。カリーヌ様に聞こえたらと思うと、ぞっとするよ。
だって、カリーヌ様をどう思う（師匠的な意味）から始まり、ルイズの事どう思う（恋愛的な意味）で終わる……俺に死ねというのか妹よ？

サイレント掛けたし大丈夫……だよな。
本当の秘密はテレパシーだし、聞こえないだろう。

テレパシーの内容としては、これからの事と神様の事。チートについても説明し、理解はできたらしい。
一番長く論議したのは、カトレア様の事だ。

やはり、カトレア様は原作通り病気にかかっており、二人に治す手段があり、病状は原作より重い可能性があるという事だ。

んっ？　何故分かるかって？　アピアーで妹が心を読んだら、カトレア様がほぼ毎日高価な水の秘薬を飲んでいて、親が無理しているのではないか？　……と気にしていたからだ。

それに、今まで俺があの方……ヴァリエール公爵に会えないのも、カトレア様の病気が関係しているらしく、領地経営に病気を治す為に飛び回っているという。

まぁ正直、治療は自体いつでもできる。

病気の兆候、病状は把握済みだし、カリーヌ様が俺を鍛えてた理由も把握できた。

どうやら、水スクウェアメイジでも治療できないらしく……藁に縋る思いで、全属性持ちというデタラメな力を持つ俺がスクウェアになれば娘を救えるかもしれない……と思ったらしい。

正直、救おうと思えば救えるし……ヴァリエール家に恩を売るのは最上の考えと言えるだろう。

だが、この病気を治す時にはこの世界の魔法でなくてはダメだ。今治せる方法では、恐らくどちらがやっても異端になる可能性がある。

口止めしたら大丈夫だろうが、どちらかの安息はうばわれるだろう。

そんな事を考えながら、いつものピリピリとした朝食を済ませ、

俺はセラと出かけようとした。しかし、部屋の前にカリーヌ様が居た。

「カリーヌ様？　どうされましたか？」

「シル。グラモン伯爵から鷹便が来ました。要約するなら、【娘が居なくなってしまった。もし、見つけたら連絡してください】……だそうです」

「……そうですか」

セラは沈んだ顔をしていた。大方、俺の為に脱走でもしてきたのだろう。

『そう、だよ』

アピアーか。便利だよなぁ……でもプライバシーも減った暮れもない！

『えっ？　お兄ちゃんにプライバシー何てあったの？』

ちょっ……酷くない？

「手紙内容からみて、ここに居るのを分かっている様でしたので、居ると返事は返しました。

鷹便ですし、来るまで一日は掛かるでしょう」

カリーヌ様はむっとした表情を浮かべ、手紙を見ていた。

「なら、今日は大丈夫ですね。二人で予定どうり遊びに行きます」
「ええ、それは構いませんよ。最近盗賊討伐も終えた所だから安全とは思いますが、馬車を用意しておきました」
そういうと、馬車がゆったりと前に止まる。しっかりとした馬が前を見据え、装飾の施された馬車が上品さを醸し出していた。
「私たちの為に、わざわざありがとうございます。ヴァリエール夫人」
セラがゆったりと礼をした。俺も合わせて頭を下げる。
「当然の事ですし、気にする必要はありませんよ」
落ち着いて優雅な礼で返すカリーヌ様。だてに年はとってないな。

とりあえず、俺は馬車に乗り込んだ。セラをエスコートし、馬車に乗せる。
「ありがとお兄ちゃん」
「気にするな男として当たり前だ。ではいって参りますカリーヌ様」
「ええ、明日からまた訓練しますから羽目を外しすぎぬように」
「はい！」
俺は軍隊式敬礼をカリーヌ様にした。同時にゆっくりと馬車が動き出し、どんどん小さくなっていった。

「ねぇ、まず何するの？」
「最初は力の確認だね。それから街を見て回ろう」
「うん！」

セラは笑顔で答えた。それもその筈で……セラは生まれてから、グラモン家唯一の女の子という理由だけで街に出ていない。軽い軟禁状態にあっていた為だ。　女の子だからダメという理由は、領地の治安が半端なく悪いのだ。領地経営に失敗し、火の車であるにも関わらず対策案は出さず……こう俺たちに言っていたのだ。
「貴族の本分は戦で名を残す事だ。良いな、命は惜しむな。名を惜しめ！！」

バカじゃないの？
借金で火の車になってるのに、名を惜しんでどうする？　そんな事教える前に領地直せよバカ親父。
『う～ん。確かに軽い軟禁状態だね。最近は、社交界とかで私を自慢してるよ。5歳でもうトライアングルになった私の娘だ！　って……。
正直嫌気がさしてたら、お父様にお兄ちゃんの事を聞く方が居て……その方曰わく、ヴァリエール公爵夫人に息子を預けるとは、閣下の血の色は何色ですか？
……と言ってたから、警護の方をスリープクラウドやゴーレムで無力化してから、フライでここに来たんだよ！』

『色々突っ込み所が多いな……まず、そいつはどこのレ○だ？』

『レ○って誰なの？　綾○？』

『残念だがクローンではないし、そんなに感情的じゃない。
だが、今回父上が探してる理由は正論だからな！！　大体ゴーレムで無力化って何したんだよ！？』

『えっ？　一応部屋に探さないでって手紙書いといたよ。
無力化……それを四文字で表すなら……ぶっころ！』
『殺すな！！　そして何故ミスフル何だよ？　それにそう書いたら探すフラグだから！』

『もう、堅いんだからぁ～』
『いやいや、堅いとかじゃないし！？　常識だから！』

心の中で懇願してる内に到着した。街に足を踏み入れると周囲の悪臭に戸惑うが仕方ない。
中世ヨーロッパ位なら排泄装置は無いし、垂れ流しは必定だよね……臭いよマジで。

「わざわざありがとうございます」
俺たちは従者さんに声を掛け、頭を下げた。
従者さんはポカーンとしたが、慌てて頭を下げた。
「い……いえ滅相もありません。頭を御上げください」
「いえ、お世話になった方にはお礼を言う。当然の事です」
ニッコリと笑顔で微笑んだセラ。従者さんは顔を赤くし、ボ～っとしていた。後にハッとして声を上げる。
「しかし、私は平民ですよ？」
「関係ないですよ。
貴族も平民も人間です、セラの言うとおり貴方にはお世話になりました。お礼を言うのは当然です。
エラそうぶってる奴らにはそれが分からんのですよ」

その後数分間言葉を交わし、平民の暮らしについて情報を得つつ、カリーヌ様への言伝をお願いした。
そして、従者さんは馬車を走らせ、ゆっくりと小さくなっていった。
「さて、まずは町外れの丘でするか？」
「そうだね。私たちの力は邪魔にならない所で確認しないとね！

えっ？　お兄ちゃん、何でハリセン構えてるの？」
「いやその～～、まっいいじゃん。早く調べて遊ぼうぜ！！」
俺は笑顔を浮かべ、丘に走り出した。
「あっ！　待ってよお兄～！！」

物凄くおぼつかない足取りで走ってくる。
転けそうで、ほぼ確実に躓きそう。色々まずくなりそうだから、一旦歩を止める。
『見晴らしが良いとバレるかもしれないから、となりの森に行こうぜ！』
「フライ！」
言い終わると、返事を待たず飛ぶ。すると、慌ててフライでこっちに飛ぶセラを見た。

side out

森の奥から怒濤のような足音と、少女悲鳴が轟く。
数十のオーク鬼の群が涎をダラダラこぼしながら走ってくる。

「きゃぁぁぁあああ！！」

甲高い悲鳴。しかし辺りに人は無く、人里の方への音は一定距離で消える……誰かがサイレントの魔法を使っている様だ。

少女は貴族であったが、杖を落としてしまい……魔法の使えない少女は逃げるしか無かった。しかし、ジリジリと差は縮まっていった。

第十四話『波乱万丈虚無曜日　中編』

二人は森の中、二重にサイレントをかけた。
「まずは俺から行くぜ？」
「良いよ。お兄の力は安全だし……
使えた方が、私も楽できそうだもの」

セラは軽い苦笑いを浮かべ、反対にシルは意気揚々と言葉を紡ぐ。
両手を前に突き出し、力を集め始めた。
大気が唸りを上げ、光がシルの目前に収束を始める。
「任意能力収得（スキル・インストール）開始！」
言葉を紡ぎ終え、光は振動するような動きをする。
動きが止むと光が広がり、画面のようになり項目が表示された。

ｓｉｄｅシル

俺たちが貰った最後の力……

それは強力な力だった……

俺の力は任意能力収得。読みはスキル・インストールというらしいが、漢字と読みが合っていない。
その名の通り、任意に能力を収得する力。使用するまで分からなかったが、コレはこのハルケギニアの魔法だけでは無く、数多に存

在する力を収得できる能力のようだ。

セラは、某真祖の吸血姫の力、空想具現化（マーブル・ファンタズム）。

俺の場合内容によるが……双方共、果てしなく強力で応用力が高い。

話がそれたが、今その力を使用している。

どうやら精神力を消費し、電子パネルの様なモノを作り、力をインストールするようだ。

「う～ん、何だかパソコンみたいだね」

確かにパソコンっぽいが……どっちかと言うと、ＳＦでよくあるモノに近いかな？

電子パネルの項目を見ると……

【基礎能力】

【技能能力】

【魔法能力】

【特殊能力】

……とまとめられ、右下に努力値５８Ｐと書かれている。

努力値って俺はポケ〇ンかよ！

「……ねぇポケ兄。努力値内訳ってあるよ！　見て見ようよ！！」

ポケ兄って……なめとるのか妹よ。

ワクワクと後ろに書いてる様な笑いはガチ止めろ。

「なめてないし、そんな顔した？」
「なめてたし、普通にそんな顔したぞ」
さらりと答えると顔を膨らました。フグか？
「私フグじゃないもん！」
……もう無視しよっと。
その思考に腹を立て、ギャーギャー言ってるが無視して内訳をタッチ。すると画面が展開し、努力値の内訳が表示された。
まずは……と見ると二人して固まった。
・　全属性ドットに目覚めた　１ｐ
「努力値の要求はかなりルナティックなんだな……」
俺はがっくりとうなだれた。
【全属性ドット】が……１ｐ。それはつまり、ほとんどの人間が手に入らないモノで１ｐだと言うのが問題ではない。
全属性ドットでは二回目は無い上に１ｐという事実が問題だ。
二回目が無くポイントが少ないモノは、普通比較的簡単な部類なモノの筈だ。
それがコレなら、とても大変なのではないか？
「おっお兄ちゃん！　そんな考察より下見てよ！」
「何を慌てている……何だと！？」

俺はその項目を見て驚愕した。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

少女は走っていた。顔を恐怖に歪ませてただひたすら……

「ブギャアアア！」

雄叫びのような怒号に肝を冷やし、少女は顔を一層歪めた。

（嫌ぁ！　誰かぁ誰かいないの！？）

息が荒れ果て、呼吸もままならぬまま、少女は躓きそうになりながら懸命に走った。途中、空気に違和感を感じたが気にする余裕は無かった。

ジリジリと近づくオーク鬼。

最初は１００メイル程あった距離も、今や１０メイルあるかないかまで追いつかれていた。

（まだなの？　町はどっちなの？）

逃げる少女は近づくオーク鬼を見て、時間がない事を悟り、少し思考に入り速度が落ちた。

鋭く衝撃を背中から受け、少女は一瞬意識を飛ばした。

（んっ……かっ囲まれちゃったの！？）

少女の周囲は、舌なめずりしたオーク鬼しか見えなかった。一匹のオーク鬼がゆらりと近づいてきた。

「あああああ〝あ〝あ〝！！」

少女の悲鳴。いや、絶叫が正しいような気もしてくる。

少女の足をオーク鬼が棍棒で叩いたのだ。

華奢な足は折れ、少女に足の感覚は無くなった。恐怖と絶望が頭に広がる中、斧を持ったオーク鬼がゆらりと近づいてくる。

「ぁあ……」

意識が朦朧する中、振り上げられた絶望を見入り声が漏れて眼を閉じた。

「殺す……」

低く冷たい声、その声にさらに恐怖が増し奥歯がガタガタとふるえ始めた。

「ギャアアア！」

轟く悲鳴に、少女は薄れる意識の中で見たのは……

……倒れるオーク鬼と金色の髪をした少年だった。

「あ……」

薄れた意識が途絶え、深い闇に落ちた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0073q/

震撼せし双極児

2011年9月4日12時10分発行